

IBM Unica Campaign

バージョン 8 リリース 6

2012 年 4 月 30 日

**データ・マイグレーション・
ガイド**

IBM

注

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、59ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Campaign バージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0 (製品番号 5725-D22)、および新しいエディションで明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Unica Campaign
Version 8 Release 6
April 30, 2012
Data Migration Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2012.5

© Copyright IBM Corporation 1996, 2012.

目次

第 1 章 データ・マイグレーションの概要 1

データ・マイグレーションとは	1
データ・マイグレーションが必要な Campaign のバージョン	1
データの再マイグレーションとは	2
再マイグレーション・モード	2
データ・マイグレーション・ステージについて	2
データ・マイグレーションの制限	3
システムの互換性	4
ファイル・システムのアクセス可能性	4
システム・テーブルのアクセス可能性と権限	4
知識の要件	5
必要なアップグレードとインストール	5

第 2 章 データ・マイグレーション環境の準備 7

必要なソフトウェアのバージョンのインストール	7
システム・テーブルのマップ	7
ターゲット・システム上での必要なパーティションの作成	7
環境変数の設定	8
データ・マイグレーションに必要な環境変数	8
データベース ID の制限の設定	13
データベース ID の制限の設定に関するガイドライン	13
ターゲット・システムでのコード形式の設定	14
ターゲット・システム上での必要なオーディエンス・レベルの作成	14
追加でトラッキングされるフィールドをターゲット・システムで作成する	15
システム・テーブルの互換性の検証	15
pathmap ファイルの作成 (Campaign 6.2.x およびそれより前のバージョンのみ)	15
pathmap ファイルに必要なエントリ	15
32 ビットから 64 ビットのバージョンへのデータのマイグレーションに関するデータベース・ドライバの要件	16
複数のオペレーティング・システムでの分散環境の準備	16
Affinium Security Manager 6.x を使用したソース・システムの場合	17
Affinium Manager 7.x を使用したソース・システムの場合	17

第 3 章 データのマイグレーション 19

データ・マイグレーション中の Web アプリケーション・サーバーのステータスについて	19
複数のパーティションのマイグレーションについて	20
データ・マイグレーションのログについて	20
データ・マイグレーションのキャンセル	20

データ・マイグレーション・スクリプトの実行	20
データ・マイグレーション・スクリプトの実行に関するガイドライン	21
ステージ 1 - セットアップする	21
ステージ 2 - 整合性検査	24
ステージ 3 - ファイル・システムの成果物	25
ステージ 4 - データベースの成果物	26
ステージ 5 - オファー、キャンペーン、およびセッションの成果物	27
ステージ 6 - データ・マイグレーションを終了する	28
Platform 構成ファイルのインポート (Affinium Manager 7.x を使用した複数のオペレーティング・システム上の分散環境のみ)	29
データ・マイグレーションの確認	29
マイグレーションの結果について	29

第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス 31

キャンペーン	31
セル	31
構成設定	32
コンタクト履歴およびレスポンス履歴	32
コントロール・グループ	35
キューおよび戦略的セグメント	35
カスタム属性	36
カスタム・マクロ	37
ユーザー定義項目	38
ディメンション階層	38
フローチャート	38
フローチャート・テンプレート	39
フォルダー	39
イニシアチブ	40
オファー	40
オファー・テンプレート	41
オファー・バージョン	42
プロセス	42
セキュリティー	45
セッション	45
テーブル・カタログ	46
トリガー	46

第 5 章 トラブルシューティング 49

入力としてスコア出力セルを受け入れるスナップショット・プロセスがマイグレーション後に未構成として表示される	49
データの再マイグレーション後に、ソース・システムの新しいフォルダーがターゲット・システムに表示されない	49
推定レスポンス履歴レコードが直接レスポンスとしてマイグレーションされる	49

ステージ 5 を再実行した後のステージ 2 のエラー	50	データ・マイグレーションのカスタム・タスクの例	55
ロック・ファイルがないとキャンペーンやセッションに対するステージ 2 の整合性検査が失敗する	50	カスタム・タスクの実装	55
ステージ 3 でデフォルトのオファー・テンプレートの作成に失敗する	50	データ・マイグレーション・ステージへのカスタム・タスクの追加	56
ステージ 5 で 2000 年より前のコンタクト/レスポンス履歴レコードのマイグレーションに失敗する	51	データ・マイグレーション・タスクの追加に必要な情報	56
フローチャートをマイグレーションまたは再マイグレーションしているときのエラー	52	データ・マイグレーション・ステージからのカスタム・タスクの削除	56
回収された機能に関連付けられ、テンプレートを経由してマイグレーションされた AGF が実行できない	53	カスタマイズされたデータ・マイグレーション・ステージ・スクリプトの実行	56
Campaign 5.1.1 からデータをマイグレーションするときの警告	53	データ・マイグレーション・タスクの実装のための Java クラスのサンプル	57
付録. データ・マイグレーションのカスタマイズ	55	特記事項	59
		商標	61
		IBM Unica 技術サポートへの連絡	63

第 1 章 データ・マイグレーションの概要

このセクションでは、Campaign のデータ・マイグレーション・プロセスの概要について説明します。

重要: 最良の結果を得るため、Campaign でデータ・マイグレーション・タスクを実行する前に、IBM® Unica のコンサルティング・サービスにご相談ください。

データ・マイグレーションとは

データ・マイグレーションとは、ソース・バージョンから別の場所の Campaign の新しいターゲットのインストール済み環境にデータを移動することを指します。IBM Unica Marketing のインストールによって提供されるデータ・マイグレーション・スクリプトのセットを実行することによって、データをマイグレーションします。

データ・マイグレーションを実行するとき、構成設定、ファイル、およびデータはソースの Campaign システムから新しいターゲット・システムにコピーされます。データ・マイグレーション・プロセスによってソース・データまたは構成ファイルが変更されることはありません。

特定のオブジェクト・タイプのマイグレーションについて詳しくは、『データ・マイグレーションのリファレンス』の章の各オブジェクト・タイプのトピックを参照してください。

データ・マイグレーションが必要な Campaign のバージョン

Affinium Campaign 5.1+ または 6.x から Campaign に移行する場合にデータ・マイグレーションが必要です。データ・マイグレーションを実行する前に、新しいバージョンの Campaign をソース・バージョンとは別の場所に正常にインストールしておく必要があります。詳しくは、インストール・マニュアルを参照してください。7.x より前のバージョンの Affinium Campaign から Campaign にインプレース・アップグレードを実行するオプションはありません。

Campaign のソース・バージョンが 7.x の場合、Campaign にアップグレードするためにデータをマイグレーションする必要はありません。7.x のソース・バージョンから Campaign にアップグレードするには、ソース・バージョンの上に Campaign のインプレース・インストールを実行します。Campaign の空のインスタンスをインストールして Affinium Campaign 7.x からオブジェクトのデータ・マイグレーションを実行するオプションはありません。

データの再マイグレーションとは

データの再マイグレーションとは、ソース・システムからターゲット・システムに同じオブジェクトを複数回マイグレーションすることを指します。このプロセスは、何らかのオブジェクト (キャンペーン、セッション、フローチャート、またはオファー) を新しいシステムですぐに運用可能な状態にできず、もう 1 回データ・マイグレーションを試行するまで、ソース・システムで運用および変更しなければならないときに必要な場合があります。ほとんどの内容のマイグレーションは、1 回のみ実行します (例: ユーザー、グループ、構成、テンプレート、テーブル・カATALOGなど)。

特定のオブジェクト・タイプの再マイグレーションについては、31 ページの『第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス』の章の各オブジェクト・タイプに関するトピックを参照してください。

再マイグレーション・モード

再マイグレーションするオブジェクトを選択するとき、以下のいずれかのモードを選択できます。

- 「**上書き (Overwrite)**」(置換) - 選択したオブジェクトが既にターゲット・システムに存在する場合、更新します。ただし、再マイグレーションされたオファーの処理がターゲット・システムに存在する場合を除きます。ターゲット・システムにオファーの処理が存在する場合、そのオファーは再マイグレーションされず、警告がマイグレーション・ログに書き込まれます。
- 「**スキップ**」(保持) - 新しいオブジェクトのみがマイグレーションされます。再マイグレーションの対象として選択されたオブジェクトがターゲット・システムに既に存在する場合、ターゲット・システムのオブジェクトが上書きされません。このモードによって、ソース・システムを継続して利用しながら、ターゲット・システムを検証できます。ターゲット・システムが動作することを確認したら、新しいオブジェクトをターゲット・システムにマイグレーションしてから、ソース・システムをオフラインにできます。

重要: 再マイグレーションの対象として選択されたオブジェクトがターゲット・システムで編集されている場合、「上書き (Overwrite)」モードを選択すると、ターゲット・システムのオブジェクトに加えられた変更は失われます。これらの変更を保持するには、「スキップ」モードを選択します。

データ・マイグレーション・ステージについて

Campaign のデータ・マイグレーション・プロセスは、6 つの個別のステージから構成され、それぞれが個別のスクリプトによって実行されます。スクリプトは、Campaign ユーティリティ・ツールのインストーラーを実行したときに `tools/migration/5.1+To8.6` フォルダにインストールされます。詳しくは、「IBM Unica Campaign インストール・ガイド」を参照してください。

環境内の各パーティションで、スクリプトを順番に実行して、システム・テーブル・データおよび対応している基礎となるすべてのオブジェクトをマイグレーションします。

スクリプトを実行する前に、マイグレーションの各ステージの目的を必ず理解し、どのスクリプトを複数回実行できるのか確認しておいてください。

ステージ 2 は、同じパーティションに対して複数回実行できますが、ステージ 3 または 4 を実行した後では実行できません。代わりに、ステージ 2 をステージ 5 の中から実行することができます。

ステージ 5 を同じパーティションに対して複数回実行して、オブジェクトを再マイグレーションできますが、ステージ 4 を実行した後、およびステージ 6 を実行する前に限ります。

他のすべてのステージは、スクリプトが完了しなかった場合を除き、1 回しか実行できません。パーティションのデータ・マイグレーションが正常に完了したことを確認していないうちは、ステージ 6 を実行しないでください。

6 つのステージは次のとおりです。

- **ステージ 1:** セットアップする
- **ステージ 2:** 整合性検査を実行する
- **ステージ 3:** ファイル・システムの成果物とシステム構成をコピーする
- **ステージ 4:** データベースの成果物をコピーする
- **ステージ 5:** オファー、キャンペーン、およびセッションの成果物をコピーする
- **ステージ 6:** データ・マイグレーションを終了して一時ファイルをクリーンアップする

データ・マイグレーション・ステージで提供されるデフォルトのタスクに加えて、Campaign は、データ・マイグレーションのタスクの追加や削除によってマイグレーション・ステージ 2 から 5 のワークフローをカスタマイズするユーティリティを提供します。詳しくは、55 ページの『データ・マイグレーションのカスタマイズ』を参照してください。

データ・マイグレーションの制限

Campaign のデータ・マイグレーション・プロセスには、以下の制限があります。

- 「インプレース」データ・マイグレーションはサポートしていません。つまり、データは IBM Unica Campaign の同じインスタンス内にはマイグレーションされません。既存のバージョンとは別の場所に Campaign の新しいバージョンをインストールする場合にのみ、データ・マイグレーション・ツールを使用します。
- ソース・システム・テーブルからターゲット・システム・テーブルにデータベース構成がコピーされることはありません。特に、以下の構成はマイグレーションされません。
 - データベース固有のスケーリングとパフォーマンスの機能 (例: DB2[®] のパーティション)。
 - ソース・データベース上にあるシステム・テーブルの既存の制約/インデックス。ターゲット・テーブルで制約/インデックスが必要な場合は、手動で再作成する必要があります。
- Campaign のインストールによって最初に <CAMPAIGN_HOME>/partitions/partition[n] にインストールされたもの以外のフォルダーはコピーされません。

- データの再マイグレーションの実行の間にオブジェクトのポリシー ID を変更することはできません。オブジェクトはすべてステージ 1 の間に選択した単一のポリシー ID を使用してマイグレーションされます。このため、さまざまなオブジェクトに割り当てられたポリシー ID に (直接または間接的に) 変更を加えないでください。

オブジェクト・タイプ、ファイル、構成設定など、一部のデータのタイプにも、固有のマイグレーションの制限と要件があります。詳しくは、31 ページの『第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス』の章の該当するトピックを参照してください。

システムの互換性

Campaign がインストールされているソースとターゲットでは、以下の点について一致している必要があります。

- 同じタイプのオペレーティング・システムにインストールされている必要があります。
- システム・テーブルに同じデータベースのタイプとバージョンを使用している必要があります。
- データベース・テーブルが同じデータベース・インスタンス内にある必要があります。
- 同じタイプの Web アプリケーション・サーバーに配置されている必要があります。

(データベースをアップグレードするなど) これらのコンポーネントを変更する必要がある場合、ソース・システムでデータ・マイグレーションを開始する前に、あるいはデータ・マイグレーションが完了した後で、アップグレードを実行する必要があります。

ファイル・システムのアクセス可能性

Campaign のソース・ファイル・システムは、ターゲットの Campaign システムから可視である必要があります。このため、両方のバージョンの Campaign が同じマシン上でホストされるか、または Campaign と Affinium Security Manager 5.1+/6.x の両方のルート・ディレクトリーが、IBM Unica Campaign データ・マイグレーション・スクリプトを実行するマシンにマウントされる共有ドライブ/NFS として追加される必要があります。

システム・テーブルのアクセス可能性と権限

Campaign システム・テーブルには、以下のアクセス可能性と権限の要件があります。

- ターゲットの Campaign システム・テーブルが、ソースの Campaign システム・テーブルと同じデータベースおよびデータベース・サーバー・インスタンス内にある必要があります。つまり、ソース・テーブルから SELECT を実行して、ターゲット・テーブルに INSERT を実行することができなければなりません。
- データ・マイグレーション・スクリプトに指定するデータベースのログインで、ソース・システム・テーブルから SELECT を実行すること、およびターゲット・

システム・テーブルに対して SELECT および INSERT を実行することができなければなりません。例えば、Oracle データベースで、GRANT SELECT ON UA_SrcTableName TO UC8DbUser などのステートメントに相当するものを、ソースの Campaign システム・データベースのすべての Campaign システム・テーブル (例: UA_Folder) で実行してから、データ・マイグレーションを実行する必要があります。

- データ・マイグレーション・ツールは、システム・テーブルと同じスキーマの一時テーブルを、指定したターゲットのパーティションに作成します。これらの一時テーブルはデータ・マイグレーションの間中使用され、選択したパーティションのすべてのデータのマイグレーションが完了した後、最後の手順でドロップされます。データ・マイグレーション・スクリプトに指定したデータベースのログインは、ターゲットの Campaign システム・テーブルを作成したユーザーと同等、またはそれより大きい権限を持っている必要があります。

知識の要件

このガイドの説明は、データ・マイグレーションを行う人が、以下の点について理解していることを前提としています。

- ファイル・システムの構造を含む、IBM Unica Campaign の一般的な機能とコンポーネント。
- Campaign のソースとターゲットのバージョンのインストールと構成のプロセス。
- Affinium Security Manager のソースのバージョンおよび IBM Unica Marketing Platform のインストールと構成のプロセス。
- ソース・システムの Affinium Security Manager の機能と使用法。
- IBM Unica Marketing Platform での構成の管理方法。
- IBM Unica のレポートを使用している場合、IBM Unica レポートのインストールと構成のプロセス。
- データベース・テーブルの表示と操作。

必要なアップグレードとインストール

データを Campaign にマイグレーションする前に、以下のタスクを実行する必要があります。

- **Marketing Platform** にアップグレードします。Affinium Security Manager からアップグレードするには、最初に Affinium Manager 7.5.1 にアップグレードして、次に Marketing Platform にアップグレードする必要があります。詳しくは、「Marketing Platform インストール・ガイド」を参照してください。
- **Campaign** のインストール、配置、および構成を行います。Campaign を Affinium Campaign のソース・システムとは別の場所にインストールします。詳しくは、「Campaign インストール・ガイド」を参照してください。
- **データ・マイグレーション・ユーティリティー**をインストールします。詳しくは、「Campaign インストール・ガイド」を参照してください。

第 2 章 データ・マイグレーション環境の準備

このセクションでは、データのマイグレーションでソース・システムとターゲット・システムを準備するときに必要なタスクについて説明します。

必要なソフトウェアのバージョンのインストール

データを Campaign にマイグレーションする前に、以下のアップグレードとインストールを実行しておく必要があります。

- IBM Unica Marketing Platform にアップグレードする前に、Affinium Security Manager から Affinium Manager 7.5.1 にアップグレードします。これは、IBM Unica Marketing Platform へは、Affinium Manager 7.5.x からしかアップグレードできないために必要です。Affinium Security Manager からアップグレードするには、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」の 7.3.1 およびそれ以前のバージョンの Affinium Manager からのアップグレードに関する説明を参照してください。
- Affinium Manager 7.5.1 から IBM Unica Marketing Platform にアップグレードします。詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform インストール・ガイド*」を参照してください。
- ソース・バージョンとは別の場所に Campaign ターゲット・システムをインストールします。ターゲット・システムがソース・システムへのフルアクセス権限を持っていることを確認します。詳しくは、「*IBM Unica Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。
- Campaign ユーティリティ・ツールのインストーラーを使用して、データ・マイグレーション・ツールをインストールします。詳しくは、「*IBM Unica Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。

システム・テーブルのマップ

1. 使用されていないものも含めて、ソース・システムのすべてのシステム・テーブルがマップされていることを確認します。
2. ターゲット・システムのすべてのシステム・テーブルをマップします。

注: eMessage と 最適化 がインストールされていない場合は、eMessage と 最適化 のテーブルはマップしないままにしておくことができます。

テーブルのマップについて詳しくは、「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

ターゲット・システム上での必要なパーティションの作成

ソース・システムに複数のパーティションがある場合は、ターゲット・システムに同じ数のパーティションを作成します。

複数のパーティションの作成と構成について詳しくは、インストール・マニュアルを参照してください。

環境変数の設定

ターゲット・システムの `setenv` ファイルを編集して、データ・マイグレーション・スクリプトが必要とする環境変数を設定します。`setenv` ファイルは、ターゲット・システムでデータ・マイグレーション・ツールをインストールしたパスの `tools/migration/5.1+To8.6` ディレクトリーにあります。

注: 環境変数では、YES と NO の値は大文字で入力する必要があります。

UNIX のみ: `setenv` ファイルの編集後、以下のコマンドを使用してファイルを実行し、変数を設定します。

```
./setenv
```

データ・マイグレーションに必要な環境変数

以下の環境変数を Campaign のターゲット・システムで設定する必要があります。これらの変数の多くは Campaign インストーラーによって設定されます。ただし、アップグレードする前に `setenv` ファイルを見直して、各設定が特定のアップグレード・シナリオに対して適切なものであるか確認する必要があります。`setenv` ファイルに含まれる指示のコメントは各設定について説明しており、インストールに関連する値を入力するのに役立ちます。

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数

変数	説明
UNICA_PLATFORM_HOME	IBM Unica Marketing Platform のインストールのルート・ディレクトリー。次に例を示します。 Windows の場合 <code>set UNICA_PLATFORM_HOME="C:¥IBM¥Unica¥Platform"</code> UNIX の場合 <code>UNICA_PLATFORM_HOME='/IBM/Unica/Platform'</code> <code>export UNICA_PLATFORM_HOME</code>
CAMPAIGN_HOME	IBM Unica Campaign のインストールのホーム・ディレクトリー。次に例を示します。 Windows の場合 <code>set CAMPAIGN_HOME="C:¥IBM¥Unica¥Campaign"</code> UNIX の場合 <code>CAMPAIGN_HOME='/IBM/Unica/Campaign'</code> <code>export CAMPAIGN_HOME</code>

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数 (続き)

変数	説明
JAVA_HOME	<p>Campaign のインストールで使用される JDK のルート・ディレクトリー。</p> <p>WebLogic 10gR3 以上では、JDK1.6 を使用するため、JDK1.6 への JAVA_HOME のパスを入力する必要があります。JDK1.6 以外の JAVA_HOME が指定されている場合、アップグレード・ツール・ユーティリティーは失敗します。</p> <p>次に例を示します。</p> <p>Windows の場合</p> <pre>set JAVA_HOME="C:\Program Files\bea\jdk150_14"</pre> <p>UNIX の場合</p> <pre>JAVA_HOME='/bea/jdk150_14'</pre> <pre>export JAVA_HOME</pre>
LOG_TEMP_DIR	<p>データ・マイグレーション・スクリプトがログ・ファイルを作成するディレクトリー。次に例を示します。</p> <p>Windows の場合</p> <pre>set LOG_TEMP_DIR=C:\temp</pre> <p>UNIX の場合</p> <pre>LOG_TEMP_DIR='/var/tmp'</pre> <pre>export LOG_TEMP_DIR</pre>
ERROR_MSG_LEVEL	<p>優先されるロギング・レベル。有効な値を、詳細度の高いものから低いものの順に挙げます。</p> <p>DEBUG</p> <p>INFO</p> <p>ERROR</p> <p>FATAL</p>
JDBC_DRIVER_CLASSPATH	<p>.jar ファイルの完全なファイル名を含む JDBC ドライバの完全パス。</p> <p>Weblogic と WebSphere® の両方で、パスに .jar ファイルを含める必要があります。</p> <p>DB2 9.1 では、db2jcc.jar と db2jcc_license_cu.jar を指定する必要があります。</p>

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数 (続き)

変数	説明
MIGRATE_FLOWCHART_TYPES	<p>マイグレーションするフローチャートのタイプ。デフォルト値は Batch の設定のままにします。</p> <p>有効な値は、"Batch"、"Event Processing"、および "Batch,Event Processing" です (Event Processing には引用符が必要です)。ただし、イベント処理の (インタラクティブ) フローチャートのマイグレーションは、現在サポートされていません。これらの値は、今後の互換性のみを目的としています。</p>
IsPartitionsSupported	<p>Campaign のソース・インストールがパーティションをサポートしているかを示します。有効な値は YES と NO です。</p>
IsSkipEnvironmentVars Prompt	<p>パーティションをサポートしていない Campaign のソース・インストールにおいて、IsSkipEnvironmentVarsPrompt はステージ 1 のスクリプトが環境変数に関するプロンプトを出すかどうかを制御します。有効な値は YES と NO です。YES に設定されると、ステージ 1 のスクリプトはこれらの値に関するプロンプトを出さず、デフォルト値が使用されます。</p> <p>IsPartitionsSupported 変数が YES に設定されると、この設定は無視されます。</p>
STRING_MAP_INFO_FILE	<p>ロケール固有のメッセージ・マッピング・ファイルがある場所。次に例を示します。</p> <p>Windows の場合</p> <pre>set STRING_MAP_INFO_FILE="C:¥IBM¥Unica¥Campaign¥tools¥migration¥5.1+To8.6¥stringsmap.xml"</pre> <p>UNIX の場合</p> <pre>set STRING_MAP_INFO_FILE='¥IBM¥Unica¥Campaign¥tools¥migration¥5.1+To8.6¥stringsmap.xml'</pre> <pre>export STRING_MAP_INFO_FILE</pre>
IGNORE_SES_TEMP_FILES	<p>一時セッション・ファイル (目印としてファイル名の最初にアンダースコア文字が付く) がコピーされるかどうかを示します。YES に設定すると、これらのファイルはコピーされません。デフォルト値は NO です。</p>
SOURCE_SYSTEM_VERSION	<p>Campaign ソース・システムのバージョン番号 (例: 5.2.2、6.4.10)。</p>

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数 (続き)

変数	説明
<p>OFFER_VERSION_COUNT_ SEPARATOR</p>	<p>ソース・システムのデータが、オファー・コードやオファー・バージョン・コードにアンダースコア文字を使用している場合にのみ、このプロパティを変更します。デフォルト値はアンダースコア () です。このプロパティは、ソース・システム・テーブルのオファー・コードまたはオファー・バージョン・コードの値のどちらにも使用されていない文字または文字の組み合わせに設定できます。</p> <p>データ・マイグレーション・スクリプトを使用する前に、選択した区切り文字がソース・システム・テーブルに存在しないことを事前に確認しておくことが重要です。DB2 データベースの次の例の SQL ステートメントは、オファー・コードとオファー・バージョン・コードにアンダースコア文字が存在するかどうかを検査します。</p> <pre>SELECT COUNT(*) FROM UA_Offer WHERE OfferCode1 LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥' OR OfferCode2 LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥' OR OfferCode3 LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥' OR OfferCode4 LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥' OR OfferCode5 LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥' OR VersionCode LIKE '%¥_%' ESCAPE '¥'</pre> <p>上記の SQL の例が一致する行を返さない場合、デフォルトのオファー・バージョン数の区切り文字が使用できません。一致する行が見つかった場合、このステートメントを変更して他の文字について確認し、適切な文字が見つかるまで繰り返します。</p>
<p>PATH (UNIX のすべてのバージョンのみ)</p>	<p>Campaign bin ディレクトリーとマイグレーション・ツールのディレクトリーを PATH 変数に追加します。以下の例は、ルート・ディレクトリーの Migration というディレクトリーにインストールされているツールのパスを示します。</p> <pre>PATH=\${CAMPAIGN_HOME}/bin:/Migration/tools/ migration/5.1+To8.6:\${PATH} export PATH</pre>

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数 (続き)

変数	説明
LD_LIBRARY_PATH (Solaris のみ)、LIBPATH (AIX® のみ)	<p>tools/migration/5.1+To8.6 ディレクトリーの LD_LIBRARY_PATH 変数 (Solaris) または LIBPATH 変数 (AIX) は、Campaign bin ディレクトリーの setenv ファイルの LD_LIBRARY_PATH または LIBPATH の設定と一致している必要があります。 tools/migration/5.1+To8.6 ディレクトリーの setenv ファイルに変数を追加して、以下の情報を含めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Campaign の bin ディレクトリーのパス • Oracle のみ: ORACLE_HOME と ORACLE_BASE <p>以下の例は、Oracle 10.2 データベースを使用する Solaris 環境に必要な LD_LIBRARY_PATH の設定を示しています。</p> <pre>ORACLE_BASE=/opt/oracle10.2 export ORACLE_BASE ORACLE_HOME=/opt/oracle10.2 export ORACLE_HOME LD_LIBRARY_PATH=/IBM/Unica/Campaign/bin:/opt/oracle10.2/lib:/usr/lib export LD_LIBRARY_PATH</pre>
JAVA_OPTIONS	<p>オプション: Java 仮想マシン (JVM) に割り当てられるヒープ・メモリーの最小値と最大値を指定します。この変数は、デフォルトでは無効です (コメント化されています)。</p> <p>データ・マイグレーション・スクリプトを実行するときにメモリーのエラーを受け取った場合は、この変数のコメントを外して設定してからスクリプトを再度実行します。</p> <p>以下に例を示します。</p> <pre>JAVA_OPTIONS="-Xms256m -Xmx512m"</pre>
UNICA_ACSYSENCODING (非 ASCII データのマイグレーションのみ)	<p>ソース・システムの unica_aclsnr.cfg ファイルの system_string_encoding プロパティの値に設定します。</p>
NLS_LANG (Oracle データベースの非 ASCII データのマイグレーションのみ)	<p>AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定します。</p>
DB2CODEPAGE (DB2 データベースの非 ASCII データのマイグレーションのみ)	<p>ターゲット・システムのデータベースの設定に従って設定します。</p>
IS_WEBLOGIC_SSL	<p>ターゲット・システムの Weblogic サーバーの接続が SSL 経由の場合、値を YES に設定して、以下の 3 つのプロパティを設定します。値を NO に設定した場合は、以下の 3 つのプロパティを設定する必要はありません。</p>

表 1. データ・マイグレーションに必要な環境変数 (続き)

変数	説明
BEA_HOME_PATH	ターゲット・システムの Weblogic サーバーのパス。詳しくは、setenv ファイルを参照してください。
SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH	ターゲット・システムの Weblogic サーバーの信頼された証明書のパス。詳しくは、setenv ファイルを参照してください。
SSL_TRUST_KEYSTORE_PASSWORD	ターゲット・システムの Weblogic サーバーのトラストストアのパスワード。詳しくは、setenv ファイルを参照してください。

データベース ID の制限の設定

ID の競合を回避するために、ソース・システムとターゲット・システムの ID の範囲が重なり合わないようにする必要があります。ソース・システムの ID は直接コピーされ、データ・マイグレーションでも ID を必要とする新しいオブジェクトがいくつか作成されます。

「構成」ページの `internalIdLowerLimit` プロパティと `internalIdUpperLimit` プロパティを使用して、各パーティションに対してデータベース ID の制限を設定します。

構成プロパティの設定については、インストール・マニュアルを参照してください。

データベース ID の制限の設定に関するガイドライン

ソース・システムとターゲット・システムにデータベース ID の制限のプロパティを設定するときは、データ・マイグレーションに関する以下のガイドラインに従います。

ソース・システム

プロパティ	ガイドライン
<code>internalIdLowerLimit</code>	オプション
<code>internalIdUpperLimit</code>	このプロパティは、次の条件を満たしている必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ID の制限の下限より高い値である ソース・システム・テーブルで使用されている ID の最大値より高い値である 新しいオブジェクトに対して未使用の ID の作成を許可する (初期データ・マイグレーション後にソース・システムが継続して使用されている場合)。

ターゲット・システム

プロパティ	ガイドライン
internalIdLowerLimit	このプロパティは、ソース・システムの ID の制限の上限より高くする必要があります。
internalIdUpperLimit	オプションです。このプロパティを設定する場合、次の条件を満たしている必要があります。 <ul style="list-style-type: none">ターゲット・システムの ID の制限の下限より高い値である。ターゲット・システム・テーブルで使用される ID の最大値より高い値である。ほとんどの場合、デフォルトの最大値 (4294967295) で十分です。

ターゲット・システムでのコード形式の設定

ターゲットの Campaign システムで生成されたコード (セル・コード、オファー・コード、およびキャンペーン・コード) のコード形式は、ソースの Campaign のインストールで生成されたコード形式と同じであるか、または互換性がある必要があります。

注: Affinium Campaign 6.4 およびそれより前のバージョンでは、cellCodeFormat のデフォルト値は Annn です。ソース・システムでこのデフォルト値を使用している場合、ターゲット・システムの値を Annn に変更してください (ターゲットの Campaign システムで使用される cellCodeFormat のデフォルト値は Annnnnnnnn です)。

ターゲット・システム上での必要なオーディエンス・レベルの作成

テンプレートで参照されているすべてのオーディエンス・レベルは、ターゲットの Campaign 環境で最初に手動で作成する必要があります。以下のガイドラインに従います。

- 各オーディエンス・レベルに対して必要なシステム・テーブルがすべて構成およびマップされていることを確認してから、テンプレートをターゲット・システムに移動します。
- オーディエンス・レベル、必要なデータベース・テーブル、およびテーブル・マッピングを、ソース・システムのオーディエンス・レベルと一致するようセットアップします。
- 同じコンタクトレスポンス履歴テーブルに複数のオーディエンス・レベルがマップされている場合は、個々のオーディエンス・レベルが使用する行のみを含むビューを使用する必要があります。

オーディエンス・レベルの作成について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

追加でトラッキングされるフィールドをターゲット・システムで作成する

データ・マイグレーション・スクリプトは、追加でトラッキングされるユーザー定義フィールドをデータベース・テーブルに追加しません。データ・マイグレーションを実行する前に、ソース・システムにある、追加でトラッキングされるすべてのユーザー定義フィールドが、ターゲット・システムで定義されていることを確認する必要があります。ソース・システムのフィールドと一致する名前とタイプを使用して、ターゲット・システムのフィールドを作成してマップします。

追加でトラッキングされるフィールドについては、「*Campaign ユーザー・ガイド*」を参照してください。

システム・テーブルの互換性の検証

ソース・システムとターゲット・システムの Campaign システム・テーブルの互換性を確認します。

- ターゲット・システムの Campaign システム・テーブルのユーザー定義フィールド (例: コンタクト履歴、レスポンス履歴、製品テーブル) は、ソースの Campaign インストールの相当するフィールドと互換性がある必要があります。これらは同じデータ型と幅を持っている必要があります。
- ターゲット・システムのコンタクト履歴/レスポンス履歴テーブルには、ユーザー定義列または UserDefinedField という名前の列のいずれかが含まれている必要があります。
- アプリケーション・サーバーの JDBC データ・ソース構成で (Weblogic の JNDI の指定、またはデータ・マイグレーション・スクリプトの入力プロンプトを直接使用して) 指定するログインは、ソースのインストールと Campaign のターゲットのインストールの両方のシステム・テーブルにアクセスできる必要があります。

pathmap ファイルの作成 (Campaign 6.2.x およびそれより前のバージョンのみ)

Campaign のソースのバージョンが 6.2.x またはそれより前の場合は、pathmap ファイルを作成して、Campaign のディレクトリーをソース・システムからターゲット・システムにマップする必要があります。

pathmap ファイルの各行には、ソース・システムのパスとターゲット・システムのパスの 2 つのディレクトリー・パスが含まれ、単一の <tab> で区切られます。pathmap (拡張子なし) というファイル名で、ターゲット・システムの <CAMPAIGN_HOME>/partitions/partition[n]/conf ディレクトリーにファイルを保存します。

pathmap ファイルに必要なエントリー

pathmap ファイルには、以下のエントリーが含まれている必要があります。

```
UNICA_UDICATDIR <partition home>/<partition[n]>/catalogs
```

```
UNICA_ACCUBEDIR <partition home>/<partition[n]>/cubes
UNICA_ACFTPDIR <partition home>/<partition[n]>/ftp
UNICA_ACSEGDIR <partition home>/<partition[n]>/segments
UNICA_ACTPLDIR <partition home>/<partition[n]>/templates
UNICA_CAMPAIGNROOTDIR <partition home>/<partition[n]>/campaigns
UNICA_SESSIONROOTDIR <partition home>/<partition[n]>/sessions
UNICA_UDICATDIR <partition home>/<partition[n]>/catalog
UNICA_ACLOGDIR <partition home>/<partition[n]>/logs
```

上記のディレクトリーの下にサブディレクトリーがある場合は、同じようにリストに追加する必要があります。例えば、UNICA_CAMPAIGNROOTDIR の下に Q1、Q2、Q3、および Q4 のディレクトリーがある場合は、以下のエントリーを pathmap ファイルに追加します。

```
<UNICA_CAMPAIGNROOTDIR>/Q1 <partition home>/<partition[n]>/campaigns/Q1
<UNICA_CAMPAIGNROOTDIR>/Q2 <partition home>/<partition[n]>/campaigns/Q2
<UNICA_CAMPAIGNROOTDIR>/Q3 <partition home>/<partition[n]>/campaigns/Q3
<UNICA_CAMPAIGNROOTDIR>/Q4 <partition home>/<partition[n]>/campaigns/Q4
```

32 ビットから 64 ビットのバージョンへのデータのマイグレーションに関するデータベース・ドライバーの要件

32 ビットから 64 ビットのバージョンの IBM Unica Campaign に移行する場合、使用している環境が以下の要件を満たしている必要があります。

- Campaign のデータ・ソースのデータベース・ドライバーは 64 ビットである必要があります。
- 関連するすべてのライブラリー・パス (例: 起動スクリプトや環境スクリプト) が、64 ビットのバージョンのデータベース・ドライバーを間違いなく参照している必要があります。

複数のオペレーティング・システムでの分散環境の準備

Campaign の Web アプリケーション、(Campaign リスナーを含む) Campaign の分析サーバー、および Marketing Platform が異なるオペレーティング・システムにインストールされている場合 (例: Windows に Campaign の Web アプリケーションと Platform、UNIX に Campaign の分析サーバー)、データ・マイグレーション用に環境を準備するための追加の手順を実行する必要があります。これらの手順は、ソース・システムが Affinium Security Manager 6.x から Affinium Manager 7.x にアップグレードされたかどうかによって異なります。

Affinium Security Manager 6.x を使用したソース・システムの場合

1. Campaign の分析サーバーのターゲット・システムにデータ・マイグレーション・ツールをインストールします。詳しくは、「*IBM Unica Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。

注: データ・マイグレーションのタスクはすべて、Campaign の分析サーバー上で実行されます。Campaign の Web アプリケーション・サーバーでは、マイグレーション・ツールは必要ありません。

2. Campaign 環境にあるすべてのデータベース・タイプのデータベース・テンプレート (例: DB2Template.xml、OracleTemplate.xml、SQLServerTemplate.xml) を、Campaign の Web アプリケーションのターゲット・システム上の <CAMPAIGN_HOME>/conf ディレクトリーから、Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上にある <CAMPAIGN_HOME>/conf ディレクトリーにコピーします。これらのテンプレート・ファイルは、マイグレーション・ステージ 3 で必要になります。
3. <MIGRATION_TOOLS_HOME>/tools/migration/5.1+To8.6 ディレクトリーの setenv ファイルに以下の変更を加えます。
 - a. JAVA_HOME プロパティを Campaign の分析サーバーのターゲット・システム (<CAMPAIGN_HOME>/jre) の JRE に設定します。
 - b. UNICA_PLATFORM_HOME プロパティを CAMPAIGN_HOME と同じディレクトリーに設定します。
4. Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上にある <CAMPAIGN_HOME> ディレクトリーの下に、authorization/confdata ディレクトリーを作成します。
5. affinium_config.xml ファイルを、Affinium Security Manager から Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上に作成した <CAMPAIGN_HOME>/authorization/confdata ディレクトリーにコピーします。このファイルは、マイグレーション・ステージ 1 と 3 で必要になります。

Affinium Manager 7.x を使用したソース・システムの場合

1. configTool ユーティリティーを Marketing Platform システムで使用して、<PLATFORM_HOME>/conf/Manager_config.xml ファイルを別の場所にエクスポートします。

マイグレーション・ステージは、Platform の設定を affinium_config.xml ファイルの設定で上書きするため、この手順が必要となります。(後続の手順で、affinium_config.xml ファイルを Campaign の分析サーバーに追加します。)データ・マイグレーションを完了した後で構成設定を元に戻すには、保存した Manager_config.xml ファイルをインポートします。

configTool ユーティリティーの使用方法について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

2. Campaign の分析サーバーのターゲット・システムにデータ・マイグレーション・ツールをインストールします。データ・マイグレーション・ツールのインストールについて詳しくは、「*IBM Unica Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。

注: データ・マイグレーションのタスクはすべて、Campaign の分析サーバー上で実行されます。Campaign の Web アプリケーション・サーバーでは、マイグレーション・ツールは必要ありません。

3. Campaign 環境にあるすべてのデータベース・タイプのデータベース・テンプレート (例: DB2Template.xml、OracleTemplate.xml、SQLServerTemplate.xml) を、Campaign の Web アプリケーションのターゲット・システム上の <CAMPAIGN_HOME>/conf ディレクトリーから、Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上にある <CAMPAIGN_HOME>/conf ディレクトリーにコピーします。これらのテンプレート・ファイルは、マイグレーション・ステージ 3 で必要になります。
4. <MIGRATION_TOOLS_HOME>/tools/migration/5.1+To8.6 ディレクトリーの setenv ファイルに以下の変更を加えます。
 - a. JAVA_HOME プロパティーを Campaign の分析サーバーのターゲット・システム (<CAMPAIGN_HOME>/jre) の JRE に設定します。
 - b. UNICA_PLATFORM_HOME プロパティーを CAMPAIGN_HOME と同じディレクトリーに設定します。
5. Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上にある <CAMPAIGN_HOME> ディレクトリーの下に、authorization/confdata ディレクトリーを作成します。
6. Affinium Security Manager から affinium_config.xml ファイルのコピーを取得します (このファイルは Affinium Manager 7.x には存在しません)。このファイルは、マイグレーション・ステージ 1 と 3 で必要になります。

このファイルは、Affinium Security Manager 6.x のバックアップ、または IBM Unica テクニカル・サポートから入手できます。独自にファイルを作成する場合は、Affinium Security Manager の認証と互換性があることを必ず確認してください。詳しくは、Affinium Security Manager 6.x の資料を参照してください。

7. affinium_config.xml ファイルを、Campaign の分析サーバーのターゲット・システム上に作成した <CAMPAIGN_HOME>/authorization/confdata ディレクトリーにコピーします。

注: affinium_config.xml ファイルの設定は無視できます。データ・マイグレーションの後で、保存した Manager_config.xml ファイルの内容で上書きします。

第 3 章 データのマイグレーション

このセクションでは、Campaign のバージョン 5.1+ から 6.x までの既存のデータを Campaign にマイグレーションする手順について説明します。これらのタスクは、インストール・マニュアルで説明しているインストール・タスクを正常に完了し、1 ページの『第 1 章 データ・マイグレーションの概要』と 7 ページの『第 2 章 データ・マイグレーション環境の準備』で説明しているデータ・マイグレーションの概念と前提条件を理解していることを前提としています。

また、データをマイグレーションする前に、以下を参照しておくことをお勧めします。

- このセクションのすべてのトピック。
- マイグレーションするデータのタイプごとの予想される結果を説明している 31 ページの『第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス』の章のトピック。

データ・マイグレーション中の Web アプリケーション・サーバーのステータスについて

データ・マイグレーション中は、Web アプリケーション・サーバーの次のガイドラインに従います。

ソース・システム

データ・マイグレーション・プロセス中、ソース・システムの Web アプリケーション・サーバーはどの状態でもかまいません (実行中またはシャットダウン済み)。ただし、ソース・システムが実行中で利用できる場合、データ・マイグレーション中にユーザーがソース・システムのデータに加えた変更は、正常にマイグレーションされない可能性があります。さらに、ソース・システムに加えられた変更が原因で、データが不整合な状態でターゲット・システムにマイグレーションされる可能性があります。このため、ベスト・プラクティスとして、ソース・システムの Web アプリケーション・サーバーとリスナーをシャットダウンし、データ・マイグレーション中は使用できないようにします。このプラクティスに従わないと、クリーンなターゲット・システムでデータ・マイグレーション・プロセスをもう一度開始しない限り、マイグレーション後のシステムを IBM Unica テクニカル・サポートが正しくサポートできなくなる可能性があります。

ターゲット・システム

ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーは常に実行中でなければならず、リスナーは停止している必要があります。このサーバーは、データ・マイグレーションに使用する JDBC データベース・ドライバーへのアクセスを提供します。またデータ・マイグレーション中、Marketing Platform Web アプリケーションは配置済みでアクティブでなければなりません。これは、ソース・システムからの構成情報の一部が Marketing Platform の「構成」ページに保存されるためです。

複数のパーティションのマイグレーションについて

複数のパーティションのマイグレーションについては、以下のガイドラインに従います。

- ソース・システムに複数のパーティションがある場合は、必ず同じ数のパーティションをターゲット・システムにセットアップしてください。
- 環境内の各パーティションで、6 個のスクリプトを順番に実行して、システム・テーブル・データおよび対応している基礎となるすべてのオブジェクトをマイグレーションします。ステージ 1 でデータ・マイグレーションを開始したら、マイグレーション対象の最初のパーティションを選択する必要があります。パーティションが 1 つしか存在しない場合は、これが自動的に選択されます。
- データのマイグレーション中は、パーティションの名前を変更できません。パーティションの名前は、ソース・システムとターゲット・システムで一致している必要があります。
- 1 つのパーティションのデータ・マイグレーションが完了してから別のパーティションのプロセスを開始してください。新しいパーティションに切り替えた後で、完了していないデータ・マイグレーションを再開することはできません。

データ・マイグレーションのログについて

それぞれのデータ・マイグレーション・ステージを実行するたびに、処理の詳細、警告、エラーが、スクリプトによって `migration.log` というログ・ファイルに書き込まれます。8 ページの『環境変数の設定』で指定しているように、ログの場所と冗長性のレベルを `setenv` スクリプト・ファイルに設定します。ステージが完了すると、ログ・ファイルの場所が表示されます。

各ステージの詳細のログは、その前のステージの詳細の後に追加されます。データ・マイグレーション・ステージごとに詳細を別個のファイルにキャプチャーすることが望ましい場合は、各ステージが完了した後、ログ・ファイルを別の名前に変更します。そうすると、次に実行するデータ・マイグレーション・ステージのログ詳細は、前のステージの詳細が記録されていない新しいログ・ファイルにキャプチャーされます。

例えば、ステージ 1 を実行した後で、`migration.log` という名前を `stage1.log` に変更します。ステージ 2 のログ詳細は、`migration.log` に書き込まれます。

データ・マイグレーションのキャンセル

どのステージでも任意のプロンプトで `abort` と入力すると、データ・マイグレーションを中止できます。

データ・マイグレーション・スクリプトの実行

データ・マイグレーション・スクリプトを実行して、Campaign のデータとファイルをターゲット・システムにマイグレーションします。

データ・マイグレーション・スクリプトは、ターゲット・システムでデータ・マイグレーション・ツールをインストールしたパスの `tools/migration/5.1+To8.6` ディレクトリにあります。スクリプト・ファイルは、実行するステージに基づいて以下のように名前が付けられています。

- `stage1`
- `stage2`
- `stage3`
- `stage4`
- `stage5`
- `stage6`

スクリプトによって、ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーまたは JDBC データベースへのログインのためのパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。パスワードはデータ・マイグレーション・スクリプトによって保存されません。

データ・マイグレーション・スクリプトの実行に関するガイドライン

すべてのデータ・マイグレーション・スクリプトについて、以下のガイドラインが適用されます。

- データ・マイグレーション・スクリプトは、マイグレーションを正しく実行するのに必要なファイルを作成します。これらのファイルは、`LOG_TEMP_DIR` パラメーターを使用して `migration.log` ファイルに対して指定したのと同じディレクトリに配置されます。マイグレーション・プロセス中は、このディレクトリのファイルを削除しないでください。
- UNIX のみ: `root` としてデータ・マイグレーション・スクリプトを実行し、複数レベルの所有権または権限を持つファイルに確実にアクセスできるようにします。
- UNIX のみ: 各データ・マイグレーション・スクリプトの開始時に指定したシェルへのパスが、使用しているシステムに合った適切なものであることを確認します。これが正しくない場合は、変更してからスクリプトを実行します。
- データ・マイグレーション・ステージを実行した後は、エラーが報告されていない場合でも、`migration.log` ファイルでエラーがないか確認することをお勧めします。
- エラーが報告された場合は、エラーを修正してからスクリプトを再実行します。

ステージ 1 - セットアップする

`stage1` スクリプトは、以下のアクションを実行します。

- ソース・システムおよびターゲット・システムに関する情報の収集
- ソース・システムおよびターゲット・システムへのデータベース接続のセットアップ
- ターゲット・システムでの一時マイグレーション・テーブルの作成または更新

ステージ 1 の実行に関するガイドライン

stage1 スクリプトは、マイグレーションしている各パーティションに対して 1 回のみ実行します。ただし、スクリプトが実行を完了できない場合は、もう一度実行する必要があります。

重要: データ・マイグレーションのステージ 1 が完了したら、Marketing Platform のユーザー名や Campaign システム・テーブルのマッピングを変更しないでください。ステージ 1 を実行した後で Marketing Platform に追加されたユーザーは、その後のステージでデータ・マイグレーション・スクリプトによって認識されません。ステージ 1 では、ユーザー名のユーザー ID への内部マッピングを構成し、これがその後のすべてのデータ・マイグレーション・ステージで参照されます。ステージ 1 の実行後に新しいユーザーを追加すると、例えば新しいユーザーが所有するオブジェクトが後のステージでマイグレーションされる場合など、データ・マイグレーションでエラーが発生する可能性があります。

ステージ 1 で必要な情報

このセクションでは、stage1 スクリプトがプロンプトを出して入力を求める情報について説明します。ほとんどの場合、スクリプトは情報を検出しようとし、選択するオプションを表示するか、情報を見つけれない場合にその情報の入力を求めるプロンプトを出します。

必要な情報	説明
ターゲット・システムのルート・インストール・ディレクトリー	ターゲット・システムのルート・インストール・ディレクトリー (PLATFORM_HOME)。スクリプトは setenv スクリプトで設定した PLATFORM_HOME の値に基づいてデフォルトを提供します。
パーティション詳細	<p>パーティション — スクリプトはソースの Campaign システムでパーティションを検出しようとします。パーティションが 1 つしか定義されていない場合は、データ・マイグレーションの対象にこれが自動的に選択されます。複数のパーティションが定義されている場合、マイグレーション対象の最初のパーティションを選択する必要があります。</p> <p>セキュリティ・ポリシー — 「PolicyID」フィールドに入力します。</p> <p>デフォルトのユーザー名 — 「CreateBy」フィールドに入力します。</p> <p>日付 — 「CreateDate」フィールドに入力します。</p>

必要な情報	説明
<p>ソース・システム・テーブルのデータベースへの接続の詳細</p>	<p>スクリプトによって、ソース・システムとターゲット・システムの両方のシステム・テーブルに接続する方法を選択するプロンプトが出されます。</p> <p>WebLogic を Web アプリケーション・サーバーとして使用する場合、WebLogic または JDBC を選択できます。 WebSphere を Web アプリケーション・サーバーとして使用する場合、JDBC を選択する必要があります。</p> <p>以下のオプションの 1 つを選択します。</p> <p>WebLogic — このオプションを選択すると、スクリプトによって以下の詳細の入力を求めるプロンプトが出されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ホスト名 — mymachine など • ポート番号 — 7001 など • Web アプリケーション・サーバーのユーザー名とパスワード • Web アプリケーション・サーバーのライブラリー .jar ファイルへの完全パス (ファイル名を含む) — C:\bea\weblogic81\server\lib\weblogic.jar など <p>JDBC — このオプションを選択すると、スクリプトによって以下の詳細の入力を求めるプロンプトが出されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ドライバーのクラス名 — oracle.jdbc.driver.OracleDriver など • ホスト、データベース名、ポートなどを含む URL — jdbc:oracle:thin:@machinename:1521:orcl など • データベースのユーザー名とパスワード
<p>ソース・システム・テーブルの情報</p>	<p>カタログ/データベース (データベース・システムが使用する用語により異なります) — スクリプトによって選択可能なオプションが検出されます。</p> <p>スキーマ/所有者 (データベース・システムが使用する用語により異なります) — スクリプトによって選択可能なオプションが検出されます。</p>
<p>ターゲット・システム・テーブルの情報</p>	<p>カタログ/データベース (データベース・システムが使用する用語により異なります) — スクリプトによって選択可能なオプションが検出されます。</p> <p>スキーマ/所有者 (データベース・システムが使用する用語により異なります) — スクリプトによって選択可能なオプションが検出されます。</p>
<p>ソース・システムの構成ファイル・ディレクトリー</p>	<p>ソース・システムの affinium_config.xml ファイルを含むディレクトリーへの完全パス。ファイル名は含めないでください。例えば、以下のように指定します。</p> <p>C:\Affinium\authorization\confdata</p>

必要な情報	説明
ソース・システムの Campaign のインストール・ディレクトリー	ソース・システムの Campaign のインストール・ディレクトリーへのパス。例えば、以下のように指定します。 C:¥Affinium¥Campaign
ソース・システムのパーティションの親ディレクトリー	ソース・システムの選択されたパーティションの親ディレクトリーへのパス。例えば、以下のように指定します。 C:¥Affinium¥Campaign¥partitions
ソース・システムとターゲット・システムのデータベース ID の制限	<p>ソース・システムの ID の制限の下限と上限に対して、新しい値を入力するか、既存の値を変更します。</p> <p>データ・マイグレーション中に、ソース・システムの構成の既存の値とは異なる値を ID の範囲に定義した場合は、データ・マイグレーション中に指定した新しい ID の範囲の値に対応するように、ソース・システムの構成を手動で更新する必要があります。そうしないと、ソース・システムが本番のままの場合、作成された新しいオブジェクトに指定範囲外の ID が割り当てられ、データ・マイグレーション・プロセスでマイグレーションされない場合があります。データ・マイグレーション・スクリプトでは、構成ファイルなど、ソースのデータやファイルが自動的に変更されることはありません。</p> <p>データベース ID の制限の設定について詳しくは、13 ページの『データベース ID の制限の設定』を参照してください。</p>

ステージ 2 - 整合性検査

stage2 スクリプトは、以下のアクションを実行します。

- ソース・システムのデータベースとファイル・システムの整合性検査を実行して、エラーを報告します。
- ソース・システムとターゲット・システムの両方の内部 ID の範囲を検証します。ソース・システムの ID は直接コピーされ、データ・マイグレーションでも ID を必要とする新しいオブジェクトがいくつか作成されます。このため、両方のシステムの ID の範囲が重なり合わないにする必要があります。詳しくは、13 ページの『データベース ID の制限の設定』を参照してください。
- 保存されるユーザー定義項目に AssignOffer マクロが存在するかどうかを確認します。このマクロを使用する項目をマイグレーションすることはできません (AssignOffer マクロはサポートされなくなりました)。
- ソースからのオーディエンス・レベルがターゲットに作成およびマップされたかどうかを (同じ項目とデータ・タイプを含め) 確認します。
- CustomerID、OfferTrackID、および ContactDate の組み合わせが同じ行がコンタクトレスポンス履歴に複数あるかどうかを確認します。重複した行が見つかったら、レコードが CHRH.log ファイルに記録されます。これは、migration.log ファイルと同じディレクトリーにあります。重複した行は、データをマイグレーションする前に、コンタクトレスポンス履歴テーブルから削除しておく必要があります。

- ソース・システムでセッションのフローチャートからコンタクトレスポンス履歴レコードにデータが挿入されているかどうかを確認します。問題のある項目は、migration.log ファイルと同じディレクトリーにある CHRH.log ファイルに記載されます。セッションのフローチャートは、データをマイグレーションする前に削除しておく必要があります。
- ターゲット・システムが空であるかどうか (クリーンかどうか) を確認します。

ステージ 2 の実行に関するガイドライン

ステージ 2 の実行については、以下のガイドラインに従います。

- ステージ 2 は、同じパーティションに対して複数回実行できますが、ステージ 3 または 4 を実行した後では実行できません。ステージ 3 またはステージ 4 の後にステージ 2 を実行すると、クリーン・ターゲット検査タスクが失敗します。ステージ 2 を複数回実行する必要がある場合は、ステージ 1 の後、およびステージ 3 の前に実行する必要があります。代わりに、ステージ 5 の中からステージ 2 を実行することができますが、ステージ 3 またはステージ 4 を実行した後で、ステージ 2 を明示的に実行することはできません。
- ステージ 2 を実行するたびに、ログに記載された依存関係違反やその他のエラーを修正するために、ソース・データベース・システムまたはファイル・システムに調整を加えなければならなくなる可能性があります。

ステージ 3 – ファイル・システムの成果物

stage3 スクリプトは、以下のアクションを実行します。

- 成果物をソース・ファイル・システムからターゲット・システムにコピーします。
- 以下のファイルの構成設定をターゲット・システムの「構成」ページにコピーします。
 - affinium_config.xml
 - dbconfig.lis
 - unica_aclnsr.cfg
 - unica_acsvr.cfg

バージョン 6.4.x より前の Campaign からの以下のファイルはマイグレーションされません。

- udisvr.cfg
- Campaign_config.xml

注: stage3 スクリプトでは、Campaign のインストールによって最初に `<CAMPAIGN_HOME>/partitions/partition[n]` にインストールされたもの以外のフォルダーはマイグレーションされません。

ステージ 3 の前提条件

stage3 スクリプトを実行する前に、以下の前提条件を満たしていることを確認してください。

- stage3 スクリプトを実行する前に、ターゲット・サーバーのパーティションに Campaign オブジェクト (例: フォルダー、キャンペーン、またはオファー) があってはなりません。Campaign データがパーティションに存在する場合、stage3 スクリプトを実行する前に削除してください。
- ソース・システムの dbconfig.lis ファイルで、Campaign がサポートしない、またはターゲット・システムにデータベース・テンプレートがないデータベースのエントリを削除します。これらのエントリが削除されていない場合、ステージ 3 が失敗します。(バージョン 5.2.1 からマイグレーションしている場合は、Redbrick のエントリを削除する必要があります。) ターゲット・システムのデータ・ソース・テンプレートは、<CAMPAIGN_HOME>/conf ディレクトリにあります。

ステージ 3 の実行に関するガイドライン

stage3 スクリプトは、マイグレーションしている各パーティションに対して 1 回のみ実行します。ただし、スクリプトが実行を完了できない場合は、もう一度開始する必要があります。失敗後にこのスクリプトを再度正常に実行するには、手操作による介入が必要になる場合があります。

ステージ 3 で必要な情報

stage3 スクリプトによって、以下の情報を求めるプロンプトが出されます。

- ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーまたは JDBC データベースへのログインのためのパスワード。パスワードはデータ・マイグレーション・スクリプトによって保存されません。
- ソースのバージョンのシステム・テーブルのデータ・ソースの名前 (例: AC_SYSTEM_TABLE)。

ステージ 4 – データベースの成果物

stage4 スクリプトは、以下のアクションを実行します。

- 特定のキャンペーンやセッションに関連付けられていないデータを、ソース・システム・テーブルのデータベースからターゲット・システムのデータベースにマイグレーションします。
- キャンペーンのフローチャートによって参照されるすべての保存オブジェクト (カスタム・マクロ、トリガー、および保存されたユーザー定義項目) を全体でソース・システムからターゲット・システムにマイグレーションします。これらのオブジェクトは、データ・マイグレーション用に個別に指定できません。

ステージ 4 の実行に関するガイドライン

stage4 スクリプトは、マイグレーションしている各パーティションに対して 1 回のみ実行します。ただし、スクリプトが実行を完了できない場合は、もう一度開始する必要があります。失敗後にこのスクリプトを再度正常に実行するには、手操作による介入が必要になる場合があります。

注: stage4 スクリプトの実行後に新しいカスタム・マクロ、トリガー、またはユーザー定義項目を作成する場合、ターゲット・システムでこれらのオブジェクトを手動で再作成する必要があります。

ステージ 5 – オファー、キャンペーン、およびセッションの成果物

stage5 スクリプトは、以下のアクションを実行します。

- 関連付けられているオファーなど、指定したキャンペーンやセッションをマイグレーションします。
- キャンペーンの関連コンタクト履歴/レスポンス履歴データをマイグレーションするかどうかを選択できるようにします。
- 選択された項目のタイプに関して、以下のものをマイグレーションするかどうかを選択できるようにします。
 - 個別の項目: スクリプトによって項目の名前の入力を求めるプロンプトが出されます。
 - 項目のフォルダー: スクリプトによってフォルダー名の入力を求めるプロンプトが出されます。サブフォルダーの内容もすべてマイグレーションされます。
 - このタイプの利用可能なすべての項目。
- 再マイグレーションする個別のフローチャートを指定できるようにします。

ステージ 5 の前提条件

stage5 スクリプトを実行する前に、以下の前提条件を満たしていることを確認してください。

- コンタクト履歴/レスポンス履歴データのマイグレーションを選択する場合は、ソース・システムとターゲット・システムの両方で、すべてのオーディエンス・レベルのテーブルを作成およびマップしておくようにします。
- マイグレーションしているフローチャートがデータ・ソースとしてフラット・ファイルを持っている場合、フラット・ファイルは、ソース・システムからターゲット・システムの対応する適切な場所に手動でコピーする必要があります。
- セッションをマイグレーションする前に、セッションのフローチャートからコンタクト・プロセスをすべて削除します。
- ソース・システムのコンタクト履歴/レスポンス履歴テーブルに、同じ顧客、日付、およびオファーを持つ複数のレコードが含まれていないことを確認します。詳しくは、32 ページの『コンタクト履歴およびレスポンス履歴』を参照してください。
- 「顧客」オーディエンス・レベルがソース・システムで使用されていない場合でも、ターゲット・システムでデフォルトのオーディエンス・レベル「顧客」がマップされていることを確認します。
- stage5 スクリプトでは、キャンペーンとフローチャートの名前が有効な文字のみで構成されているかどうかの確認は行いません。バージョン 6.2.x より前の Affinium Campaign では、現在制限されている文字のいくつかをキャンペーンとフローチャートの名前に使用することができました。特殊文字の詳細について「*IBM Unica Campaign ユーザー・ガイド*」を参照して、キャンペーンとフローチャートをマイグレーションする前に、これらのオブジェクトの名前が有効な文字のみで構成されていることを確認してください。

ステージ 5 の実行に関するガイドライン

stage5 スクリプトの実行については、以下のガイドラインに従います。

- ステージ 5 を同じパーティションに対して複数回実行して、オブジェクトを再マイグレーションしたり、新しいオブジェクトをマイグレーションしたりできます。
- このスクリプトにより選択した項目や項目のグループのマイグレーションが完了するたびに、他のデータをマイグレーションするかどうかを選択できます。スクリプトが完了する前に、マイグレーションするすべての項目に対してスクリプト内でデータ・マイグレーションの手順を繰り返すことができます。
- コンタクトレスポンス履歴のマイグレーションは、マイグレーションするデータ量に応じて、長い時間がかかることがあります。最初にキャンペーンとフローチャートをマイグレーションしてコンタクト履歴はマイグレーションせず、その後コンタクトレスポンス履歴のみをマイグレーションすることができます。

ステージ 5 で必要な情報

stage5 スクリプトによって、以下の情報を求めるプロンプトが出されます。

- ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーまたは JDBC データベースへのログインのためのパスワード。パスワードはデータ・マイグレーション・スクリプトによって保存されません。
- コンタクトレスポンス履歴データのマイグレーションの場合: Campaign の管理者権限を持つユーザー名。複数のパーティションに対して stage5 スクリプトを実行している場合、現在マイグレーションしているパーティションの管理者権限を持つユーザー名を必ず入力します。

ステージ 6 – データ・マイグレーションを終了する

stage6 スクリプトは、ターゲット・システムから一時データ・マイグレーション・テーブルをクリーンアップして削除します。

重要: ステージ 6 を実行するとき、データ・マイグレーション中に作成された一時テーブルは削除されます。このため、ステージ 6 を実行した後で、同じパーティションにこれ以上データ・マイグレーションを実行することはできません。データ・マイグレーションの新しいサイクルを実行するには、Campaign のクリーンなインストール済み環境に、もう一度ステージ 1 から開始する必要があります。

ステージ 6 の前提条件

現在のパーティションのデータ・マイグレーションと再マイグレーションがすべて完全に終了し、ソース・システムのパーティションの内容がなくなった場合のみ、ステージ 6 を実行します。

重要: ステージ 5 でマイグレーションできないキャンペーンやセッションがある場合、stage6 スクリプトは実行に失敗します。失敗したキャンペーンやセッションに対してこれ以上処理を行わずに、ステージ 6 を実行する場合は、MigConfig_Status テーブルの taskid 501 のステータスを 0 から 1 に変更します。

Platform 構成ファイルのインポート (Affinium Manager 7.x を使用した複数のオペレーティング・システム上の分散環境のみ)

データ・マイグレーションを完了した後で、Campaign Web アプリケーション、Campaign の分析サーバー、および Marketing Platform が異なるオペレーティング・システムにインストールされており (例: Windows に Web アプリケーションと Marketing Platform、UNIX に Campaign の分析サーバー)、ソース・システムが Affinium Manager 7.x にアップグレードされた場合、データ・マイグレーションを実行する前にエクスポートしておいた Manager_config.xml ファイルを、Marketing PlatformconfigTool ユーティリティでインポートします。

configTool ユーティリティの使用方法については、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

データ・マイグレーションの確認

6 つのデータ・マイグレーション・ステージを実行した後で、データ・マイグレーションが正常に完了したことを確認します。

1. Campaign サーバーを再起動します。
2. Campaign のターゲット・インストールにログインして、以下のタスクを実行できることを確認します。
 - フローチャートとプロセス・ボックスを表示して開きます。
 - フローチャートをテスト実行します。

マイグレーションの結果について

Campaign に正常にマイグレーションしたオブジェクトのほとんどは、マイグレーションを完了するためにそれ以上の操作を必要としません。ただし、以下のトピックにリストされる例外に注意する必要があります。

以下の Campaign オブジェクトなどのマイグレーションの詳細については、31 ページの『第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス』を参照してください。

マイグレーションの完了に手動の手順を必要とする可能性があるオブジェクト

- コントロール・グループ
- ディメンション階層のテーブル
- キューブまたは戦略的セグメントを作成するフローチャート
- トリガーによって開始されるファイルまたはスクリプト
- 以下のプロセス
 - コンタクト
 - セグメント化
 - 最適化
 - レスポンス
 - スナップショット

- トラッキング
- AssignOffer () マクロを使用するプロセス

マイグレーションされるがサポートされないプロセス

以下のプロセスは、プロセスが存在するフローチャートの一部としてマイグレーションされますが、Campaign ではサポートされなくなりました。新しいバージョンの Campaign で正常に実行するには、フローチャートからこれらのプロセスを手動で削除する必要があります。

- Decision
- eMessage
- イベントイン
- イベントアウト
- 推奨

マイグレーションもサポートもされないプロセス

- 評価
- オプションの選択
- オプションのテスト

マイグレーションされない、バージョン 6.4.x より前の Campaign からの構成設定ファイル

- Campaign_config.xml

第 4 章 データ・マイグレーションのリファレンス

このセクションでは、オブジェクト・タイプ、ファイル、構成設定など、Campaign の特定のタイプのデータのマイグレーションに関する要件と制限について詳しく説明します。ソース・システムからターゲット・システムにデータをマイグレーションする前に、このセクションのトピックを参照して、マイグレーションするデータのタイプで予期される結果を理解しておいてください。

キャンペーン

マイグレーション

キャンペーンは、個別にマイグレーションすることも、指定されたフォルダーの一部としてマイグレーションすることもできます。関連付けられているオファーとフローチャートは、各キャンペーンの一部としてマイグレーションされます。キャンペーンをマイグレーションするとき、関連付けられたコンタクト/レスポンス履歴を含めるよう選択したり、コンタクト/レスポンス履歴を後でマイグレーションしたりできます。詳しくは、32 ページの『コンタクト履歴およびレスポンス履歴』を参照してください。

再マイグレーション

キャンペーンは、個別に再マイグレーションすることも、指定されたフォルダーの一部として再マイグレーションすることもできます。関連付けられているオファーとフローチャートは、キャンペーンの一部として再マイグレーションされます。

キャンペーンを再マイグレーションするとき、「上書き (Overwrite)」モードと「スキップ」モードのいずれかを選択することによって、既にターゲット・システムにあるオブジェクトをどのように処理するかを指定できます。既存のフォルダーに再マイグレーションされるキャンペーンは、マイグレーション中、指定されたセキュリティ・ポリシーを無視して、ターゲット・システムの指定された宛先フォルダーのセキュリティ・ポリシーを使用します。

ターゲット・システムにはあるがソース・システムに存在しない新しいフローチャートは、キャンペーンの再マイグレーション時に影響を受けたり変更されたりすることはありません。

セル

セルはフローチャートのプロセスを使用してマイグレーションおよび再マイグレーションされます。詳しくは、42 ページの『プロセス』を参照してください。

構成設定

マイグレーション

以下の構成ファイルからの設定は、Marketing Platform の「構成」ページにマイグレーションされます。

- affinium_config.xml
- dbconfig.lis
- unica_aclnsr.cfg
- unica_acsvr.cfg

バージョン 6.4.x より前の Campaign からの以下のファイルはマイグレーションされません。

- udisvr.cfg
- Campaign_config.xml

再マイグレーション

構成ファイルは再マイグレーションできません。

コンタクト履歴およびレスポンス履歴

マイグレーション

マイグレーションするキャンペーンを選択するとき、コンタクト履歴およびレスポンス履歴をマイグレーションするかどうか選択できます。コンタクト履歴とレスポンス履歴は一緒にマイグレーションすることしかできません。一方のみをマイグレーションしてもう一方はマイグレーションしない、ということはありません。

コンタクト/レスポンス履歴をマイグレーションするときは、以下の制限に注意してください。

- **セッション:** IBM Unica Campaign は、セッションからのコンタクト/レスポンス履歴レコードのマイグレーションまたは再マイグレーションを許可しません。セッションを Campaign にマイグレーションまたは再マイグレーションする前に、セッションのフローチャートからコンタクト・プロセスを削除する必要があります。
- **「日付」フィールドと「時刻」フィールド:** Campaign のコンタクト/レスポンス履歴レコードに、「日付」フィールドと「時刻」フィールドの両方が含まれるようになりました。7.x より前のバージョンの Campaign からのコンタクト/レスポンス履歴レコードには、日付は含まれますが時刻は含まれません。オファー、日付、および顧客の組み合わせは、Campaign のこれらの各レコードで一意である必要があります。ソース・システムのコンタクト履歴/レスポンス履歴テーブルに同じ顧客、日付、およびオファーを持つ複数のレコードが含まれている場合、データ・マイグレーションは失敗し、stage2 スクリプトが条件を検出してエラーのフラグを設定します。

この問題を回避するには、以下のオプションのいずれか 1 つを選択します。

- 重複するエントリーを削除することによって、コンタクト履歴レコードをクリーンアップします。
- オーディエンス・キー、オファー、および日付によって行が正規化されているコンタクト履歴のビューを作成します。このビューをコンタクト履歴のシステム・テーブルとしてマップします。
- **推定レスポンス履歴レコード:** データ・マイグレーション・スクリプトは、マイグレーションされたレスポンスが直接レスポンスか推定レスポンスかを判断できないため、デフォルトでこれらのレコードすべてが直接レスポンスとしてマイグレーションされます。

代替の方法として、マイグレーションされるすべてのレコードを、直接ではなく推定として設定できます。このためには、レスポンス履歴レコードをマイグレーションした後で、UA_ResponseHistory テーブルの DirectResponse フィールドの値を 0 に変更することで、レスポンス・レコードを推定に更新します。

再マイグレーション

コンタクトレスポンス履歴の再マイグレーションには、以下の要件と制限が適用されます。

- 再マイグレーションするキャンペーンを選択するとき、コンタクト履歴/レスポンス履歴を再マイグレーションするかどうかを選択できます。履歴だけをマイグレーションして、キャンペーン (およびターゲット・システムに加えられたそれ以降の変更) はそのままにしておくことを選択できます。コンタクト履歴/レスポンス履歴は一緒に再マイグレーションすることしかできません。一方を再マイグレーションしてもう一方は再マイグレーションしない、ということはできません。
- ターゲット・システム・テーブルに既にあるレコードと同じ日付で生成されたコンタクトレスポンス履歴レコードは、再マイグレーションできません。
- コンタクトレスポンス履歴を再マイグレーションするとき、データ・マイグレーション・スクリプトは日付に基づいてターゲット・システムのコンタクトレスポンス履歴レコードを検査します。ターゲット・システムのレコードと同じ日付を持たないソース・システムのレコードは、ターゲット・システム・テーブルに挿入されます。ただし、ソース・システムからのコンタクトレスポンス履歴レコードが、ターゲット・システムに既にあるレコードと日付を共有する場合、これらのレコードはマイグレーションされません。この状態は、コンタクトレスポンス履歴を生成するフローチャートが同じ日付で複数回実行された場合に発生する可能性があります。ソース・システムにそのようなデータが含まれている場合は、ターゲット・システムから冗長なレコードを削除してからコンタクトレスポンス履歴を再マイグレーションしてみる必要があります。
- ソース・システムのレスポンス・プロセスを削除して再構成する場合は、UA_Response テーブルの ResponseID が削除され、同じ OfferTrackID に対応する新しい ResponseID が挿入されます。こうすると、削除された ResponseID に対応するレスポンス履歴レコードは、「孤立」した状態になります (つまり、関連付けられた OfferTrackIDs を持っていません)。新しい日付でレスポンス履歴レコードが生成された場合、新しい ResponseID に対してレコードが挿入されます。データ・マイグレーション・スクリプトは孤立したレスポンス履歴レコードをマイグレーションできません。新しい ResponseID に対応するレスポンス履歴レコードのみがマイグレーションされます。

- Affinium Campaign 6.x のマイグレーションされたフローチャートに変更を加え、その結果 OfferTrackID が変更された場合、古い OfferTrackID は削除され、関連付けられたコンタクト履歴レコードは「孤立」した状態になります (つまり、関連付けられた OfferTrackID を持っていません)。変更されたフローチャートとコンタクト履歴を再マイグレーションするとき、現在の構成からは OfferTrackID および関連付けられたコンタクト履歴レコードのみがマイグレーションされます。孤立したコンタクト履歴レコードはマイグレーションされません。
- コンタクトレスポンス履歴を再マイグレーションするには、変更されたフローチャートも再マイグレーションする必要があります。フローチャートを再マイグレーションせずに、コンタクトレスポンス履歴のみを再マイグレーションすると、コンタクト履歴はマイグレーションされません。

コンタクトレスポンス履歴のみの再マイグレーション

ステージ 5 のオプション 1 で、コンタクトレスポンス履歴のみをマイグレーションすることを選択できます。このセクションでは、2 つのシナリオでコンタクトレスポンス履歴データのみを再マイグレーションした結果について説明します。

シナリオ 1

1. ソース・システムからターゲット・システムにコンタクトレスポンス履歴なしでフローチャートをマイグレーションします。
2. ソース・システムでフローチャートを実行します。
3. ターゲット・システムのフローチャートを変更します。
4. ソース・システムからターゲット・システムにコンタクトレスポンス履歴のみを再マイグレーションします。

結果: ターゲット・システムの変更されたフローチャートはそのままになります (上書きされません)。ソース・システムからのコンタクトレスポンス履歴は、すべてターゲット・システムに移動されます。ターゲット・システムで変更されたフローチャートを実行すると、そのフローチャート実行からの新しいコンタクトレスポンス履歴データがターゲット・システムに追加され、ターゲット・システムのマイグレーションされたコンタクトレスポンス履歴データはそのままになります。

シナリオ 2

1. ソース・システムからターゲット・システムにコンタクトレスポンス履歴を含めてフローチャートをマイグレーションします。
2. ソース・システムでフローチャートを再実行します。
3. ターゲット・システムのフローチャートを変更します。
4. ソース・システムからターゲット・システムにコンタクトレスポンス履歴のみを再マイグレーションします。

結果: ターゲット・システムの変更されたフローチャートはそのままになります (上書きされません)。ソース・システムからのコンタクトレスポンス履歴はすべて、(コンタクトの日付の変更などの) トラッキング・プロセスを使用して作成された個別のコンタクト履歴レコードの更新も含めて、ターゲット・システムに移動されます。ターゲット・システムで変更されたフローチャートを実行すると、そのフローチャート実行からの新しいコンタクトレスポンス履歴データがターゲット・システ

ムに追加され、ターゲット・システムのマイグレーションされたコンタクトレスポンス履歴データはそのままになります。

コントロール・グループ

現在のバージョンの Campaign と以前のバージョンの Campaign では、コントロール・グループの機能に大きな違いがあるため、コントロール・グループは Campaign のターゲット・システムにマイグレーションされません。

現在のバージョンの Campaign では、コントロールはすべて以下のようになっています。

- 非コンタクト制御です
- コンタクト・リストに出力されません
- パフォーマンス・レポートにロールアップされません

以前のバージョンの Campaign のコントロールがある場合は、ターゲット・システムで手動で再作成する必要があります。

キューブおよび戦略的セグメント

マイグレーション

キューブ・プロセスまたはセグメント化プロセスを含むフローチャートはマイグレーションされますが、基礎となる実際のキューブ・ファイルまたは戦略的セグメント・ファイルはマイグレーションされません。

ターゲット・システムでキューブまたは戦略的セグメントを使用可能にするには、マイグレーション後にこれらのフローチャートを再実行して、キューブまたは戦略的セグメントを再作成する必要があります。

複数の入力セグメントを使用して構成されたキューブは、Campaign ではサポートされません。複数の入力セグメントを持つキューブを Campaign のターゲット・システムにマイグレーションする場合、マイグレーション後のターゲット・システムのキューブは未構成になります。

また、マイグレーションするキューブのいずれかが、入力用テーブルとしてフラット・ファイルを使用するディメンション階層に基づく場合、これらのフラット・ファイルをターゲット・システムに移動して、ソース・システムでの場合と同様に再マップする必要があります。関連付けられたフラット・ファイルを移動して再マップした後もターゲット・システム上でキューブ・プロセスが実行できない場合は、キューブ・プロセスを削除して新しく作成し、削除したものとまったく同じように構成して、その新しいキューブ・プロセスを実行します。

再マイグレーション

キューブ・プロセスまたはセグメント化プロセスを含むフローチャートは再マイグレーションできますが、キューブ・ファイルまたは戦略的セグメント・ファイルはマイグレーションまたは再マイグレーションされません。

カスタム属性

マイグレーション

カスタム属性は、そのカスタム属性が属性となっているオブジェクトと一緒に 1 回だけマイグレーションできます。

これらの属性の検査は、ステージ 2 の一部として実行されます (特別な検査タスク)。これらの条件のいずれかが存在する場合、ステージ 2 は失敗し、条件がエラーとして migration.log ファイルに記録されます。

非文字列データ型のドロップダウン値

Campaign バージョン 8.1.x および 8.2.x は、カスタム・キャンペーン属性またはカスタム・オファー属性の非文字列データ型のドロップダウン値をサポートしていません。バージョン 6.x からのマイグレーション、またはバージョン 7.x からのアップグレードを実行しており、カスタム・キャンペーン属性またはカスタム・オファー属性に非文字列データ型のドロップダウン値がある場合、これらの値を含むセクションをソース・システムの unica_fldinfo.xml ファイルから削除してからアップグレードまたはマイグレーションを実行することをお勧めします。これらの値を削除しないと、アップグレードまたはマイグレーション後にエラーが発生する可能性があります。

カスタム・キャンペーン属性

カスタム・キャンペーン属性をマイグレーションするときは、以下の制限に注意してください。

- Campaign は、text、varchar、および string などのデータ型のカスタム・キャンペーン属性値を、UA_CampAttribute テーブルの StringValue 列に保存します。デフォルトで、この列は varchar(1024) に設定されます。Affinium Campaign バージョン 7.5.x 以前では、これらの属性は UA_CampaignExtAttr テーブルの列に保存されます。カスタム・キャンペーン属性を Campaign にマイグレーションするときに、Campaign のソース・バージョンに 1024 バイトを超える文字値を持つカスタム属性が含まれている場合、これらの属性を変更するか、SQL アップグレード・スクリプトの UA_CampAttribute テーブルの StringValue 列を変更して、データを格納できるようにする必要があります。
- ソース・システムのカスタム・キャンペーン属性が、ターゲットのデフォルトのシステム定義フィールド、またはソースのカスタム・オファー属性とまったく同じ名前を持っている場合、これらの属性の名前を変更してから、ターゲット・システムにマイグレーションする必要があります。

カスタム・オファー属性

カスタム・オファー属性をマイグレーションするときは、以下の制限に注意してください。

- 以前のバージョンの Campaign から UA_OfferExtAttr テーブルは、現在のバージョンの IBM Unica Campaign には存在しなくなりました。ソース・システムの UA_OfferExtAttr の内容と、unica_fldinfo.xml ファイルからのオファー属性の詳細は、ターゲット・システムの対応する新しいテーブル UA_OfferAttribute、UA_AttributeDef、および UAEnumAttrValues にマイグレーションされます。

- Campaign は、text、varchar、および string などのデータ型のカスタム・オファー属性値を、UA_OfferAttribute テーブルの StringValue 列に保存します。デフォルトで、この列は varchar(1024) に設定されます。カスタム・オファー属性を Campaign にマイグレーションするときに、Campaign のソース・バージョンに 1024 バイトを超える文字値を持つカスタム属性が含まれている場合、これらの属性を変更するか、SQL アップグレード・スクリプトの UA_OfferAttribute テーブルの StringValue 列を変更して、データを格納できるようにする必要があります。
- ソース・システムのカスタム・オファー属性が、ターゲットのシステム定義フィールド、またはソースのカスタム・キャンペーン属性とまったく同じ名前を持っている場合、これらの属性の名前を変更してから、ターゲット・システムにマイグレーションする必要があります。

重要: IBM Unica Campaign が指定するデフォルトの属性定義は、データ・マイグレーション後に編集しないでください。エラーが発生することがあります。デフォルトおよびカスタムの属性について詳しくは、「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

再マイグレーション

カスタム属性の再マイグレーションはサポートされていません。つまり、マイグレーション済みのソース・システム・オブジェクトに新しいカスタム属性を追加する場合、メイン・オブジェクト (キャンペーンまたはオファーなど) を再マイグレーションすることはできても、それらの新しいカスタム属性をマイグレーションすることはできません。

ただし、ソース・システムのカスタム・オファー属性の値を変更して、そのオファーを再マイグレーションした場合、カスタム・オファー属性の新しい値はターゲット・システムに引き継がれます。オファーの属性値の一部は再マイグレーションできません。詳しくは、40 ページの『オファー』の『再マイグレーション』セクションを参照してください。

カスタム・マクロ

マイグレーション

キャンペーンのフローチャートによって参照されるカスタム・マクロやその他の保存オブジェクト (トリガーおよびユーザー定義項目) は、ステージ 4 の間にまとめてソース・システムからマイグレーションされます。個別に指定してマイグレーションすることはできません。

ステージ 5 で、キャンペーンがマイグレーションされる時、これらのオブジェクトへの参照を含むフローチャートがマイグレーションされます。

AssignOffer マクロ

AssignOffer() マクロは、Campaign ではサポートされません。AssignOffer() マクロを使用する保存されたユーザー定義項目はマイグレーションされません。このことが原因で、保存されたユーザー定義項目のインスタンスがマイグレーションされ

ない場合、stage2 スクリプトによって生成されるマイグレーション・ログに警告が記録されます。

再マイグレーション

カスタム・マクロの再マイグレーションはサポートされていません。

ユーザー定義項目

マイグレーション

キャンペーンのフローチャートによって参照されるユーザー定義項目やその他の保存オブジェクト (カスタム・マクロおよびトリガー) は、ステージ 4 の間にまとめてソース・システムからマイグレーションされます。個別に指定してマイグレーションすることはできません。

ステージ 5 で、キャンペーンがマイグレーションされる時、これらのオブジェクトへの参照を含むフローチャートがマイグレーションされます。

再マイグレーション

ユーザー定義項目の再マイグレーションはサポートされていません。

ディメンション階層

マイグレーション

ディメンション階層は、1 回しかマイグレーションできません。ディメンション階層定義はマイグレーションされますが、ディメンション階層テーブルはマイグレーションされません。これらはマイグレーション後にターゲット・システムでセットアップする必要があります。

再マイグレーション

ディメンション階層の再マイグレーションはサポートされていません。

フローチャート

マイグレーション

フローチャートは、キャンペーンまたはセッションの一部としてマイグレーションされます。詳しくは、31 ページの『キャンペーン』と 45 ページの『セッション』を参照してください。

一部のフローチャートでは、マイグレーション後に手操作による介入が必要となる場合があります。また、一部のマイグレーションされたフローチャートに、サポートされなくなった以前のバージョンの Campaign からのプロセスが含まれることがあります。詳しくは、29 ページの『マイグレーションの結果について』を参照してください。

再マイグレーション

フローチャートの再マイグレーションには、以下の要件と制限が適用されます。

- フローチャートは、キャンペーンまたはセッションの一部として再マイグレーションできます。また、キャンペーンのすべてのフローチャートを再マイグレーションしなくても済むように、キャンペーン内の特定のフローチャートを再マイグレーションするよう選択できます。
- ターゲット・システムにフローチャートが既に存在し、それに関連付けられた処理がターゲット・システムにある場合、キャンペーンに関連付けられたフローチャートは再マイグレーションされません。
- 再マイグレーションするよう選択されたフローチャートがターゲット・システムで見つからないのに、それに関連付けられた処理がある場合、既存の処理、およびそのフローチャートに関連付けられたコンタクト/レスポンス履歴は、フローチャートのマイグレーションの前に削除されます。この動作は、履歴がクリアされずにフローチャートがターゲット・システムから削除されるシナリオに対応します。
- 以前のマイグレーション以降、ソース・システムで再マイグレーションされたフローチャートの所有権が変更されている場合、ターゲット・システムの所有権が更新されてこれを反映します。
- マイグレーションされたフローチャートの名前がソース・システムまたはターゲット・システムで変更されている場合、フローチャートを再マイグレーションすることはできません。再マイグレーションする必要があると予想される場合、マイグレーションされたフローチャートの名前を変更しないでください。

フローチャート・テンプレート マイグレーション

フローチャート・テンプレート・ファイルはすべてそのままターゲット・システムにマイグレーションされますが、UA_FlowchartTpl テーブルのエントリはマイグレーションによって挿入されません。ターゲットの IBM Unica Campaign システムでは、マイグレーション後、保存されたテンプレートが初めて「編集」モードでフローチャートに貼り付けられたときに、自動的にテーブルにデータが挿入されます。

再マイグレーション

フローチャート・テンプレートの再マイグレーションはサポートされていません。

フォルダー

マイグレーション

オブジェクトのフォルダー全体をマイグレーションするよう選択できます。ソース・システムの既存のツリー構造は、そのままマイグレーションされます。

再マイグレーション

オブジェクトのフォルダー全体を再マイグレーションできます。

初期マイグレーション後、ソース・システムのフォルダー間でオブジェクトが移動されている場合、再マイグレーションしようとする、前にターゲット・システムにマイグレーションされたサポート対象のファイルは、元のフォルダーがある場所に残ります。再マイグレーションされるフォルダーは、マイグレーション中、指定されたセキュリティー・ポリシーを無視し、ターゲット・システムで指定されたセキュリティー・ポリシーを使用します。

イニシアチブ

イニシアチブはマイグレーションおよび再マイグレーションできます。

オファー

マイグレーション

オファーは、フォルダーの内容の一部として、またはキャンペーンの一部として（つまり、キャンペーンがオファーを参照する場合）、個別にマイグレーションすることができます。

オファーをマイグレーションするときは、以下の制限に注意してください。

- オファーに関連付けられた処理がターゲット・システムにある場合、オファーはマイグレーションされません。マイグレーション・プロセスはそのようなオファーをスキップしますが、マイグレーションは続行します。
- ステージ 5 のメニューのオプションである「キャンペーンに関連付けられていないオファー (Offers not associated with any campaign)」で個々のオファーを指定してマイグレーションできます（オファーの名前とオファー・バージョンをコマンドで区切って指定する必要があります）。このオプションを使用してマイグレーションできるのは、キャンペーンに関連付けられていないオファーのみです。
- 7.x より前のバージョンの Campaign からマイグレーションされたオファーは、Campaign で使用されるものと互換性がないオファー・バージョンのコード形式を使用します。新しい形式を使用するようオファー・バージョン・コードを再生成しない限り、これらのオファーを編集できません。
- パートの数が 4 つを超えたマルチパートのオファー・コードはマイグレーションできません。ターゲット・システムにマイグレーションする前に、ソース・システムでこれらのオファーを変更する必要があります。

クリエイティブ

Campaign は、オファー 1 つ当たりの複数のクリエイティブをサポートしません。7.x より前のバージョンの Campaign から複数のクリエイティブを持つオファーをマイグレーションしている場合は、各オファーの最初のクリエイティブのみがマイグレーションされます。オファーに関連付けられた最初の 1 つ以外のクリエイティブはドロップされます。

カスタム・オファー属性

詳しくは、36 ページの『カスタム属性』の『カスタム・オファー属性』セクションを参照してください。

オファー・テンプレート

詳しくは、『オファー・テンプレート』を参照してください。

再マイグレーション

オファーの再マイグレーションは、ステージ 5 のマイグレーションでサポートされ、キャンペーンの再マイグレーションの一部として、または (キャンペーンで使用されていない場合に) 個別に選択して実行できます。オファーを再マイグレーションするとき、「上書き (Overwrite)」モードと「スキップ」モードのいずれかを選択することによって、既にターゲット・システムにあるオブジェクトをどのように処理するかを指定できます。詳しくは、2 ページの『再マイグレーション・モード』を参照してください。

既存のフォルダーに再マイグレーションされるオファーは、マイグレーション中、指定されたセキュリティー・ポリシーを無視して、ターゲット・システムの指定された宛先フォルダーのセキュリティー・ポリシーを使用します。

ターゲット・システム上で本番使用されているオファー (つまり、ターゲット・システム・テーブルに処理を書き込んだオファー) が再マイグレーションされると、ソース・システムのオファー属性に加えられた変更によっては、オファーのコンタクト履歴がターゲット・システムで無効になる場合があります。オファーを再マイグレーションする前に、コンタクト履歴の再マイグレーションの影響を必ず評価してください。

オファーを再マイグレーションするとき、ソース・システムで以下のオファー属性に加えられた (以前のマイグレーション以降の) 変更は、再マイグレーションによって引き継がれません。

- オファー・バージョン名
- バージョン・コード
- オファー・コード
- オファー・グループ ID

オファー・テンプレート

マイグレーション

7.x より前のバージョンの Campaign には、オファー・テンプレートが含まれていません。7.x より前のソース・システムから Unica Campaign にオファーをマイグレーションするとき、マイグレーション・プロセスはデフォルトのテンプレートを作成します。マイグレーションされたすべてのオファーは、ターゲット・システムでこのデフォルトのオファー・テンプレートを使用します。

再マイグレーション

オファーが再マイグレーションされる時、オファー・テンプレートは変更されません。オファーが最初にマイグレーションされたときにオファーに関連付けられた元のテンプレートは変更されません。

オファー・バージョン

マイグレーション

7.x より前のバージョンの Campaign のオファー・バージョンは、Campaign に新しいオファーとしてマイグレーションされます。各オファー・バージョンに関連付けられたコンタクト履歴は、ターゲット・システムの新しい各オファーにマイグレーションされます。

マイグレーション後、ターゲット・システムの新しいオファーは、次のとおりです。

- オファー名: <オファー名> - <オファー・バージョン名>
- オファー・コード: <システム生成のオファー・コード> - <バージョン・コード>
- 新しいオファー・カスタム属性: オファー・カスタム属性の値は、ソース・システムからのオファー・バージョン・コードです。
- 新しいオファー・カスタム属性: <オファー名> - <グループ・コード>、ここで <グループ・コード> は、UA_Offer テーブルの OfferGroupID です。

再マイグレーション

オファー・バージョンの再マイグレーションは、オファーの再マイグレーションと同じ方法で処理されます。詳しくは、40 ページの『オファー』の『再マイグレーション』セクションを参照してください。

プロセス

マイグレーション

ソース・システムで構成されたプロセスは、ほとんどの場合、構成プロセスとして Campaign にマイグレーションでき、手操作による介入なしで実行できます。例外を以下に示します。

注: マイグレーション後、ターゲット・システムの一部のプロセスが未構成で、「セル・コード形式が無効です」というエラーが表示されることがあります。これは、セル・コード形式がソース・システムの形式と同じでも生じ得ます。これらのプロセスを構成するには、プロセス設定を開き、「全般」タブで「OK」ボタンをクリックします。プロセス・ボックスが自動的に構成されます。

手操作による介入を必要としないプロセス

以下のプロセスが構成され、マイグレーション後ユーザー介入なしで実行できます。

- オーディエンス
- コール・リスト*
- キューブ
- 書き込み
- マージ
- メール・リスト*

- モデル
- サンプル
- スケジュール
- セグメント
- 選択
- スコア

*『コール・リスト・プロセスおよびメール・リスト・プロセスのマイグレーション』セクションに記載されている例外を参照してください。

手操作による介入が必要なプロセス

以下のプロセスは、データのマイグレーション後に手操作による介入を必要とします。

プロセス	マイグレーションの結果
Contact	マイグレーションされたフローチャートのメール・リスト・プロセスに変換されますが、手動で再構成する必要があります。
セグメント化	マイグレーションされますが、データ・マイグレーション後は未構成です。作成しているセグメントに対してセキュリティー・ポリシーを選択する必要があります。
最適化	マイグレーションされますが、データ・マイグレーション後は未構成です。
レスポンス	マイグレーションされますが、データ・マイグレーション後は未構成です。データ・マイグレーション後、UA_UsrResponseType テーブルで有効なユーザー・レスポンス・タイプを設定して、レスポンス・プロセスを構成するためのダイアログで、「レスポンス・タイプ・コード」を選択して、少なくとも一致するフィールドとして処理コードをマップする必要があります。
スナップショット	スナップショット・プロセスから出力されたファイルはマイグレーションされません。必要に応じて、これらのファイルを手動でターゲット・システムに移動する必要があります。
Track	マイグレーションされますが、データ・マイグレーション後は未構成です。コンタクト・ステータスは、7.x より前のバージョンの Campaign では存在しません。コンタクト履歴にログを記録するようマイグレーションされたトラッキング・プロセスを構成して、既存のすべての生成された処理に対してコンタクト・ステータスと処理コードを設定する必要があります。

コール・リスト・プロセスおよびメール・リスト・プロセスのマイグレーション

コール・リスト・プロセスとメール・リスト・プロセスはマイグレーション後ユーザー介入なしで構成され、実行することができます。ただし次の例外があります。

- **エクスポートの宛先:** Campaign では、コンタクト・プロセス (コール・リストとメール・リスト) で、エクスポートの宛先を指定しておく必要があります。

Affinium Campaign 6.x では、エクスポートの宛先は必要ありません。Campaign 6.x からエクスポートの宛先が指定されていないコンタクト・プロセスをマイグレーションしている場合、これらのプロセスは Campaign へのマイグレーション後に未構成になります。マイグレーション前にソース・システムでエクスポートの宛先を指定することも、マイグレーション後に Campaign で再構成することもできます。

- **オファー・バージョン名:** オファー・バージョン名は Campaign ではサポートされていません。ソース・システムのフローチャートの コール・リスト・プロセスまたはメール・リスト・プロセスで、バージョン名を含むオファーを割り当てている場合、これらのプロセスは Campaign にマイグレーションしたときに未構成になります。これらのプロセスは手動で再構成する必要があります。

サポートされなくなったプロセス

以下のプロセスを含むフローチャートはマイグレーションされます。ただし、これらのプロセスは Campaign ではサポートされません。これらのフローチャートを構成して実行することはできますが、結果は予測不能になる場合があります。このため、マイグレーション後にターゲット・システムから削除することをお勧めします。

- 決定
- eMessage
- イベントイン
- イベントアウト
- 推奨

マイグレーションされないレガシー・プロセス

Affinium Campaign 4.x からの以下のプロセスは、Campaign ではサポートされません。これらのプロセスを含むフローチャートがマイグレーションされる時、これらのプロセスはマイグレーションされたフローチャートに表示されません。

- 評価
- オプションの選択
- オプションのテスト

セル・コード

7.x より前のバージョンの Campaign のプロセスの「セル・コード」タブは、Unica Campaign では存在しません。データ・マイグレーション・プロセスは適切なセル・コードを検出し、ターゲット・セルを作成した出力プロセスからのプロセスに関連付けます。まれなケースとして、同じセルに対して 2 つ以上の異なるセル・コード値がダウンストリームにある場合、データ・マイグレーション・プロセスはその中の 1 つを選択して使用します。選択されたセル・コードと選択されていないセル・コードに関する詳細は、個別のフローチャートのログに収集されます。

Unica Campaign では、複数のコンタクト・プロセスへの入力として使用されるセルが、別のセル・コードを持つことはできません。別のセル・コードが必要な場合

は、最初にセルをコピーして (例: 選択プロセスを使用して「すべて選択」)、2 番目のコンタクト・プロセスで使用するときに、別のセル名をセルのコピーに割り当てる必要があります。

AssignOffer マクロ

7.x より前のバージョンの Campaign の AssignOffer() マクロは、Campaign ではサポートされません。AssignOffer() マクロを使用するプロセスは、マイグレーション後は未構成として表示されるため、手動で再構成する必要があります。

再マイグレーション

プロセスの再マイグレーションは、フローチャートの再マイグレーションを通じて実行されます。詳しくは、38 ページの『フローチャート』を参照してください。

セキュリティ

マイグレーション

ソース・システムに存在するユーザーとグループは、そのまま保持およびマイグレーションされます。

IBM Unica Campaign に付属のデフォルトのセキュリティ・ポリシーは、以下の役割に関して後方互換性があり、手操作による介入は必要ありません。

- 読み取り専用
- 読み取り/書き込み
- 読み取り/書き込み/実行
- 管理者

再マイグレーション

セキュリティ・データの再マイグレーションはサポートされていません。

セッション

マイグレーション

セッションは、個別にマイグレーションすることも、指定されたフォルダーの一部としてマイグレーションすることもできます。関連付けられたフローチャートは、各セッションの一部としてマイグレーションされます。

保存オブジェクト

セッションのフローチャートによって参照される保存オブジェクト (カスタム・マクロ、トリガー、および保存されたユーザー定義項目) は、すべてステージ 4 の間にまとめてソース・システムからマイグレーションされます。個別に指定してマイグレーションすることはできません。

ステージ 5 で、セッションがマイグレーションされる時、これらのオブジェクトへの参照を含むフローチャートがマイグレーションされます。

コンタクト・プロセス

Campaign では、セッションに関連付けられたフローチャートでコンタクト・プロセス (メール・リスト、コール・リスト) を使用することはできません。セッションを Campaign にマイグレーションする前に、セッションのフローチャートからコンタクト・プロセスを削除する必要があります。これらのプロセスから生成されたコンタクトレスポンス履歴のデータは失われます。

再マイグレーション

セッションの再マイグレーションには、以下の要件と制限が適用されます。

- セッションは、個別に再マイグレーションすることも、指定されたフォルダーの一部として再マイグレーションすることもできます。セッションが再マイグレーションされる時、そのセッション内のフローチャートも再マイグレーションされます。
- セッションを再マイグレーションするとき、「上書き (Overwrite)」モードと「スキップ」モードのいずれかを選択することによって、既にターゲット・システムにあるオブジェクトをどのように処理するかを指定できます。詳しくは、2 ページの『再マイグレーション・モード』を参照してください。
- ターゲット・システムにはあるがソース・システムに存在しない新しいフローチャートは、セッションの再マイグレーション時に影響を受けたり変更されたりすることはありません。

テーブル・カタログ

マイグレーション

テーブル・カタログのファイル・システム・フォルダーは、すべてそのままターゲット・システムにマイグレーションされますが、UA_TableCatalog のエントリはマイグレーションによって挿入されません。ターゲットの IBM Unica Campaign システムでは、保存されたカタログが初めて「編集」モードでフローチャートから表示されるとき、テーブルにデータが自動的に挿入されます。

再マイグレーション

テーブル・カタログの再マイグレーションはサポートされていません。

トリガー

マイグレーション

キャンペーンのフローチャートによって参照されるトリガーやその他の保存オブジェクト (カスタム・マクロおよびユーザー定義項目) は、ステージ 4 の間にまとめてソース・システムからマイグレーションされます。個別に指定してマイグレーションすることはできません。

ステージ 5 で、キャンペーンがマイグレーションされる時、これらのオブジェクトへの参照を含むフローチャートがマイグレーションされます。

UA_TriggerList システム・テーブルに保存されるトリガーへの参照はマイグレーションされます。ただし、トリガーによって起動されるファイルやスクリプトはマイグレーションされません。これらのファイルは任意の場所に保存され、マイグレーション・ツールはこれらのファイルを移動しません。ターゲット・システムにファイルを手動で移動して、UA_TriggerList の対応する値が更新されていることを確認する必要があります。

UA_TriggerList テーブルがソース・システム上の場所を指す定義とともにマイグレーションされる場合、ターゲット・システムの適切なトリガー定義の場所を反映するようトリガー定義を変更する必要があります。または、ソース・システムで参照されたトリガーの実行ファイルをターゲット・システムの場所にコピーして、新しい場所を反映するよう UA_TriggerList.Definition を更新することもできます。

再マイグレーション

トリガーの再マイグレーションはサポートされていません。

第 5 章 トラブルシューティング

Campaign のデータのマイグレーションと再マイグレーションに関する問題のトラブルシューティングについては、このセクションを参照してください。

入力としてスコア出力セルを受け入れるスナップショット・プロセスがマイグレーション後に未構成として表示される

問題またはエラー: 入力としてスコア出力セルを受け入れるスナップショット・プロセスがマイグレーション後に未構成として表示されます。

解決方法: この問題を回避するには、以下の手順を実行します。

1. ターゲット・システムで、マイグレーションされている編集対象のフローチャートを開きます。
2. スナップショットのプロセス設定で、「入力」ドロップダウン・リストのスコア・プロセスから入力セルを選択します。
3. 「OK」をクリックして、スナップショット構成に対する変更を保存します。

データの再マイグレーション後に、ソース・システムの新しいフォルダーがターゲット・システムに表示されない

問題またはエラー: ソース・システムで新しく作成したフォルダー内のキャンペーン、セッション、オファーなどの項目を再マイグレーションした後で、新しいフォルダーがターゲット・システムで表示されません。

解決方法: この問題を回避するには、ターゲット・サーバーを再起動してキャッシュをフラッシュするか、またはターゲット・サーバーがキャッシュを更新するまで待ちます。これで、新しいフォルダーとその内容がターゲット・サーバーで表示されます。

推定レスポンス履歴レコードが直接レスポンスとしてマイグレーションされる

問題またはエラー: 推定レスポンス履歴レコードが直接レスポンスとしてマイグレーションされます。

解決方法: データ・マイグレーション・スクリプトは、7.x より前のバージョンの Campaign でトラッキングされたレスポンスが直接か推定かを判断できないため、デフォルトでこれらのレコードすべてが直接レスポンスとしてマイグレーションされます。

代わりに方法として、マイグレーションされるすべてのレコードを、直接ではなく推定として設定できます。このためには、レスポンス履歴レコードをマイグレーシ

ョンした後で、UA_ResponseHistory テーブルの DirectResponse フィールドの値を 0 に変更することで、レスポンス・レコードを推定に更新します。

ステージ 5 を再実行した後のステージ 2 のエラー

問題またはエラー: (ステージ 5 内から呼び出された) ステージ 2 で報告されたエラーを修正した後、stage5 スクリプトを直接再実行すると、以下のエラーが表示されます。

「初期マイグレーション・ステージが正常に実行されていません。マイグレーションを中止しています。(Initial migration stages are not run successfully.Aborting migration.)」

解決方法: データ・マイグレーションを続行するには、以下の手順を実行します。

1. stage2 スクリプトを (ステージ 5 内からではなく、外部から) 実行します。
2. ステージ 2 の「クリーン・ターゲット検査タスク」に関するもの以外はエラーがないことを確認します (このエラーは無視します)。他のエラーが報告された場合は、エラーを修正してから stage2 スクリプトを再実行します。
3. 「クリーン・ターゲット検査タスク」に関するエラーを修正するには、MigConfig_Status テーブルを手動で更新して、Status = 1 を設定します。このとき StageId = 2 および taskID = 212 です。
4. stage5 スクリプトを実行します (ステージ 3 またはステージ 4 は実行しないでください)。

ロック・ファイルがないとキャンペーンやセッションに対するステージ 2 の整合性検査が失敗する

問題またはエラー: キャンペーンやセッションのロック・ファイルが partition[n]/campaigns フォルダーまたは partition[n]/sessions フォルダーにない場合、それがソース・システムに存在しても、キャンペーンやセッションに対するステージ 2 の整合性検査が失敗します。

解決方法: stage2 スクリプトに -f オプションを指定して実行し、ロック・ファイルを作成します。これで、キャンペーンやセッションが正常にマイグレーションできるようになります。

ステージ 3 でデフォルトのオファー・テンプレートの作成に失敗する

問題またはエラー: stage3 スクリプトがデフォルトのオファー・テンプレートの作成に失敗し、5 個以上のオファー・コードが使用中であることを示すエラーがマイグレーション・ログに表示されます。

解決方法: Campaign では、パートの数が 4 つを超えたマルチパートのオファー・コードはサポートされていません。ターゲット・システムにマイグレーションする前に、ソース・システムでこれらのオファーを変更する必要があります。

この問題を回避するには、以下の手順に従います。

1. 4 つを超えたパートを持つオファー・コードを含まないように、ソース・システムのオファーを変更します。

例えば、Campaign 6.2.5 のソース・システムで、unica_acsvr.cfg ファイルの UACOfferCodeUsed プロパティを 5 未満の値に設定します。unica_acsvr.cfg ファイルは、Campaign ソース・システムの /Campaign/config ディレクトリにあります。

2. データベース・タイプに適した DDL スクリプトを実行し、Campaign システム・テーブルを再作成し、データを再挿入します。
3. ターゲット・システムのデータベースから、(名前の接頭部が MIG_ の) 一時マイグレーション・テーブルを削除します。
4. ターゲット・システムのパーティションのデフォルト・フォルダー (例: partitions/<partition_name>/campaigns や partitions/<partition_name>/catalogs) に追加されたファイルやフォルダーを削除します。デフォルト・フォルダーは削除しないでください。
5. データ・マイグレーション・スクリプトを実行している場所から bootstrap_migration.xml ファイルを削除します。
6. ターゲット・システムを再起動して、これがクリーンなシステムであることを確認します。
7. データ・マイグレーション・ステージをステージ 1 から再実行します。

ステージ 5 で 2000 年より前のコンタクトレスポンス履歴レコードのマイグレーションに失敗する

問題またはエラー: ステージ 5 で、2000 年 1 月 1 日より前の日付のコンタクトレスポンス履歴レコードのマイグレーションに失敗し、「健全性制約に違反しました (親キーが見つかりません) (integrity constraints violated (parent key not found))」というエラーが表示されます。

解決方法: デフォルトで、UA_Calendar テーブルには、20000101 (2000 年 1 月 1 日に相当) で開始される DateID レコードが含まれます。2000 年 1 月 1 日より前のコンタクトレスポンス履歴レコードは、ContactDateTime または ResponseDateTime の値が UA_Calendar テーブルに存在しない日付 ID を参照しているため、マイグレーションに失敗します。

この問題を回避するには、以下の手順に従い、ターゲット・システムの UA_Calendar テーブルに必要な日付 ID を挿入します。

1. 以下のクエリをソース・システムのデータベースで実行して、最古のコンタクトレスポンス履歴レコードを判断します。

```
select min(ContactDate) from UA_ContactHistory
```

```
select min(ResponseDate) from UA_ResponseHistory
```

2. ターゲット・システムの UA_Calendar テーブルに、必要な日付の範囲の日付 ID を挿入します。SQL Server 用の以下の例では、1999 年 1 月 1 日から 1999 年 12 月 31 日までのレコードを挿入します。太字の値を、それぞれ最初と最後の日付を指定する値に置き換えます。

注: 以下のサンプル・コードは、Campaign のインストールの ddl ディレクトリーにある ac_populate_tables_sqlsvr.sql スクリプトからのものです。データベースが DB2 または Oracle の場合、データベース・タイプに合った DDL スクリプトからのコードを使用します (DB2 は ac_populate_tables_db2.sql、Oracle は ac_populate_tables_ora.sql)。

```
declare @date_v datetime
set @date_v = '01/01/1999'
set datefirst 7
set dateformat mdy
while @date_v <= '12/31/1999'
begin
    insert into UA_Calendar
    (Year, FiscalYear, Quarter, FiscalQuarter,
    Month,
    WeekOfYear,
    WeekOfMonth,
    DayOfYear, DayOfMonth, DayOfWeek,
    ActualDate,
    FirstDayOfWeek,
    LastDayOfWeek,
    DateID) values
    (DATEPART(yyyy, @date_v), DATEPART(yyyy, @date_v), DATEPART(q,
    @date_v), DATEPART(q, @date_v),
    DATEPART(mm, @date_v),
    DATEPART(ww, @date_v),
    DATEDIFF(dd, DATEADD(dd, -1, DATEADD(ww, DATEDIFF(ww, 0, DATEADD(dd, -
    (DAY(@date_v) - 1), @date_v)), 0)), @date_v) / 7 + 1,
    DATEPART(dy, @date_v), DATEPART(dd, @date_v), DATEPART(dw, @date_v),
    @date_v,
    DATEADD(dd, -1, DATEADD(wk, DATEDIFF(wk, 0, @date_v), 0)),
    DATEADD(dd, 5, DATEADD(wk, DATEDIFF(wk, 0, @date_v), 0)),
    CAST (CONVERT (varchar(20), @date_v, 112) AS BIGINT))
    set @date_v = DATEADD(dd, 1, @date_v)
end
```

フローチャートをマイグレーションまたは再マイグレーションしているときのエラー

問題またはエラー: ステージ 5 のフローチャートのデータ・マイグレーション/再マイグレーション中に、migration.log ファイルに以下のようなエラーが表示されることがあります。

```
"ERROR stage5.....No resource is associated with key "<KeyName>"
```

または

```
ERROR stage5.Stage5Driver [2988] - Unable to get ID table for identifier null or No resource associated with key....
```

解決方法: これらのエラーは無視してかまいません。データ・マイグレーション・プロセスやマイグレーションされたオブジェクトに悪影響はありません。

回収された機能に関連付けられ、テンプレートを經由してマイグレーションされた AGF が実行できない

問題またはエラー: Campaign で回収された機能に関連付けられている Affinium 定義項目 (Campaign では Campaign 定義項目) が、マイグレーションされたテンプレートで使用されている場合、テンプレートは正常に実行できません。

解決方法: テンプレートの AGF の参照は新しい環境でも引き続き存在しますが、テンプレートを正常に実行するには、現在のオブジェクトを参照するよう変更する必要があります。例えば、Affinium Campaign 6.x からのトラッキング・コードがユーザー定義項目の計算で参照されている場合、Campaign の新しい処理コードを使用するようユーザー定義項目を変更するか、または廃止されたトラッキング・コードへの参照を削除するよう他の方法で変更する必要があります。同様に、トラッキング・コードやその他の回収された AGF がベンダー・ファイルの出力項目やコンタクト履歴にマップされている場合、テンプレートが正常に実行するには、回収された AGF を削除して、別の項目で置き換える必要があります。

Campaign 5.1.1 からデータをマイグレーションするときの警告

問題またはエラー: Affinium Campaign 5.1.1 からデータをマイグレーションするために stage2 スクリプトを実行した後で、migration.log ファイルに以下の警告が表示されます。

```
warning: Failed to find the table mapping for UA_IDSByType. It also  
displays: templatetablename <---> templatetblname...Fail.
```

解決方法: この警告は無視してかまいません。

付録. データ・マイグレーションのカスタマイズ

重要: 最良の結果を得るため、Campaign でデータ・マイグレーション・タスクを実行する前に、IBM Unica のコンサルティング・サービスにご相談ください。

Campaign では、マイグレーション構成ユーティリティ (acMigConfigTool) を使用して、マイグレーション・ステージ 2 から 5 のワークフローをカスタマイズし、データ・マイグレーション・タスクを追加または削除できます。データ・マイグレーション・ステージのデフォルトのタスクがデータ・マイグレーションのニーズに対応しない場合は、カスタム・タスクを使用します。データ・マイグレーション・ステージをカスタマイズするために Java インターフェースを実装するには、Campaign で提供される Java API を使用します。

データ・マイグレーションのカスタム・タスクの例

ステージ 2 から 5 のデータ・マイグレーションのワークフローに追加できるタスクの例を以下に示します。

- Campaign のデータとディスクの成果物の、別のディスク位置へのバックアップ
- 一時ファイルの削除
- フローチャート実行からのフラット・ファイルの出力 (例: 顧客のコンタクト・リスト) のマイグレーション
- ユーザー・テーブルからのサポート対象のデータのマイグレーション
- ログ・ファイルのマイグレーション

カスタム・タスクの実装

カスタムのデータ・マイグレーション・タスクの実装には、4 つの主要な手順があります。

1. タスクを作成します。タスクと環境のニーズに応じて、タスクはシェル・スクリプト、SQL スクリプト、または .bat ファイルなどとして実装できます。
2. カスタマイズするデータ・マイグレーション・ステージ用の Java インターフェースを実装するための Java クラスを選択します。Unica は、ステージ 2 から 5 用の Java クラスのサンプル・セットを提供しています。詳しくは、57 ページの『データ・マイグレーション・タスクの実装のための Java クラスのサンプル』を参照してください。
3. データ・マイグレーション・スクリプトに必要な環境変数が正しく設定されていることを確認します。8 ページの『環境変数の設定』を参照してください。
4. Campaign マイグレーション構成ユーティリティ (acMigConfigTool) を実行して、データ・マイグレーション・ステージにカスタム・タスクを追加します。acMigConfigTool ユーティリティを実行するときには、カスタム・タスクを組み込むためのコマンドを Java クラスへのパラメーターとして渡します。詳しくは、56 ページの『データ・マイグレーション・ステージへのカスタム・タスクの追加』を参照してください。

データ・マイグレーション・ステージへのカスタム・タスクの追加

重要: acMigConfigTool を実行する前に、データ・マイグレーション・スクリプト stage1 が実行済みであることを確認します。stage1 スクリプトが実行済みでないと、acMigConfigTool はエラーを生成します。

マイグレーション構成ユーティリティ (acMigConfigTool) を実行して、プロンプトに従いマイグレーション・ステージにカスタム・タスクを追加します。

注: 追加するカスタム・タスクにマイグレーション・ステージの他のタスクへの依存関係がある場合、カスタム・タスクをワークフローの適切な場所に確実に配置します。

データ・マイグレーション・タスクの追加に必要な情報

マイグレーション・タスクの追加を選択した場合、acMigConfigTool ユーティリティによって以下の情報を求めるプロンプトが出されます。

- タスクを追加するデータ・マイグレーション・ステージ。
- 新しいタスクを挿入するステージ・ワークフロー内の位置。
- タスクの記述名。例: 「ステージ 2 中にシェル・コマンドを実行する」。
- タスクの実装に使用する Java クラスが含まれている .jar ファイルの完全パスとファイル名。
- Java クラスの完全なクラス名。
- カスタム・タスクの実行に使用されるコマンド。このコマンドは、Java クラスへのパラメーターとして渡されます。

データ・マイグレーション・ステージからのカスタム・タスクの削除

重要: acMigConfigTool を実行する前に、データ・マイグレーション・スクリプト stage1 が実行済みであることを確認します。stage1 スクリプトが実行済みでないと、acMigConfigTool はエラーを生成します。

マイグレーション・ステージ 2 から 5 でカスタム・タスクを削除するには、acMigConfigTool ユーティリティを実行して、プロンプトに従い、削除するタスクを指定します。

重要: デフォルト・タスクの削除は推奨されません。デフォルト・タスクの削除後にマイグレーション・スクリプトを実行すると、マイグレーションが無効になり、大きな問題が発生する可能性があります。

カスタマイズされたデータ・マイグレーション・ステージ・スクリプトの実行

データ・マイグレーション・スクリプトをカスタマイズした後、20 ページの『データ・マイグレーション・スクリプトの実行』の手順に従ってスクリプトを実行できます。

データ・マイグレーション・タスクの実装のための Java クラスのサンプル

Campaign のインストールでは、カスタマイズ可能なマイグレーション・ステージごとに Java クラスのサンプルを 1 つ提供しています。これらのクラスは、マイグレーション・ステージをカスタマイズできる Java インターフェースを実装します。各サンプル・クラスは、マイグレーション・ステージ中に、指定したカスタムのマイグレーション・タスクを実行するシステム・コールを行います。

/tools/migration/5.1+To8.6 ディレクトリーの `samplecallouts.jar` ファイルには、以下の Java クラスのサンプルが含まれます。

- `Stage2ShellTask.java`
- `Stage3ShellTask.java`
- `Stage4ShellTask.java`
- `Stage5ShellTask.java`

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、『www.ibm.com/legal/copytrade.shtml』をご覧ください。

IBM Unica 技術サポートへの連絡

ドキュメンテーションを参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM Unica 技術サポートに電話することができます。このセッションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM Unica 管理者にお問い合わせください。

収集する必要がある情報

IBM Unica 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM Unica 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM Unica のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM Unica アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM Unica 技術サポートの連絡先情報

IBM Unica 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM Unica 製品技術サポートの Web サイト (<http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm>) を参照してください。



Printed in Japan